# 解題編

# 青森県立郷土館

## 【1】津軽外ヶ浜真景図

写一巻

青森県立郷土館蔵（二三六七―一）

〔書名読み〕つがるそとがはましんけいず

〔著編者〕大野文泉（おおのぶんせん）

〔写刊年次〕文化四年（一八〇七）

〔寸法〕縦三〇・〇×横約六〇〇糎　一六図

〔装訂〕巻子本

〔備考〕紙本着色。シミ、ハガレあり。

〔解説〕

津軽半島の北端部にある、鬼泊（現東津軽郡今別町綱不知（つなしらず）付近）から今別（現同郡今別町）を通り、算用師峠を越えて小泊（現北津軽郡中泊町）に至る道筋の風景を描いたものである。

本図は、次の一六の図で構成されている。それぞれの題辞を記す。

（1）外浜鬼泊石門舎利浜より今別に至るの道

（2）今別の東鬼泊より眺望

（3）今別南入口よりかえりに見る図

（4）今別の西北より三厩を望

（5）三厩観音花表のあたりよりミる

「三厩観音」とは、龍馬山観音堂のこと。明治初年に龍馬山義経寺（現東津軽郡外ヶ浜町）となり、現在に至る。

「花表」とは鳥居のこと。現在でも鳥居はあるが、本図が描かれた後の嘉永二年（一八四九）に寄進されたと思われるものである。

（6）三よし越左右絶壁渓泉を道とす

「三よし」および、この後に現れる「三吉」とは、算用師（現東津軽郡外ヶ浜町三厩算用師）のこと

（7）三吉越東望三厩より小泊江至る

（8）三吉越西一里許湖水辺に至り西海を望

（9）三吉越西おり口より竜飛崎を望

（10）三吉越を過六七丁にして海を望

（11）三吉越より小泊に至の道

（12）三よし峠を下りて小泊を望

（13）小泊を過ること一里許海面を望む

（14）三よしを下り十丁許にして西望

（15）三よし越を過る道海岸瀑布

（16）小泊脇元に至るの道七里長浜を望む

当時は、三厩から海岸づたいに歩いて小泊に抜けることはできず、ここに描かれたような険しい山道が、三厩から小泊などの津軽半島西岸に抜ける最短の陸路として使われていた。

本図は、海岸等の風景が中心であり、繊細な描写や鮮やかな彩色がみられる。特に、波の白は鮮明である。遠景に見える山や地名については、註釈が入れられている。集落の様子はあまり詳細には描かれず、わずかに遠景でのみ描かれている。人物も少なく、同行者と考えられる旅装束の男一～二名が描かれている図があるに過ぎない。本図のなかには、空が暗い色に描かれていて、雨の日に写生したと思われる図がいくつかあり、写実性を大いに重んじて描かれたことがうかがわれる。

著者である大野文泉は白河生まれ。幼名は梅之丞、万平。名は安勝。文泉は号。年少の頃、藩主の命で江戸に出て、晩年の谷文晁に師事して

絵を学び、帰国してから白河藩の御用絵師となり、松平定信に仕えている。

寛政八年（一七九六）八月、江戸で横目（目付）を仰せ付けられた。この役は、職務のため各地の巡察など比較的自由な移動を伴うものであり、その後の写生旅行には有利なものであった。寛政十二年（一八〇〇）、定信が編集した古物等を描いた図集『集古十種』では、古器物の書写を担当している。これが彼の画業の中で語られることが多いという。ほかにも、各地に派遣され、甲冑・武具等の古物を写生や真景図の製作を行った。

文泉が本図を描いたのは文化四年（一八〇七）のことである。この年は四月に幕府が弘前・盛岡両藩に宗谷防衛を命じ、五月にはロシア船の利尻島侵入に対して、奥羽諸藩に蝦夷地出兵を命じるなど、北方警備が強化されていく時期である。

文泉らは、同年八月に写生のため北に赴き、仙台周辺の古甲冑、中尊寺・毛越寺の古物、遠野南部氏の甲冑、櫛引八幡宮の甲冑を描いたあと、下北・津軽両半島で写生を行った。十一月には白河に帰り、旅先で写生したものを清書した。本図もこの時に製作されたものと考えられる。この旅には須賀川の十念寺の住職である白雲と白河藩家老田井元陳が同行している。白雲は文泉とともに『集古十種』の製作にも関わった。

文泉は、後に、姓を「巨野」、号を「泉祐」と改めた。文化八年（一八一一）、林述斎の命を受けて対馬に赴き、朝鮮からの朝貢を受け取る際に従っている。文政六年（一八二三）、白河の松平家は桑名に転封となるが、その際、文泉も従っている。天保八年（一八三七）年没。享年六四。

なお、文泉は文化四年に下北半島で写生したものをもとに「南部下北半島真景図」（青森県立郷土館蔵）も描いている。これは、本図とは違い、牧場など、現地の生業をうかがわせるものが描きこまれている。文政元年には「奥州白河郡大坋（おおぬかり）村山泉之図」（神戸市立博物館蔵）を描いている。これらはいずれも本図とともに、文泉が製作した、現存が確認されている数少ない真景図である。

〔参考〕

・川延安直「『御絵師巨野泉祐　勲功書』について」（『福島県立博物館紀要』一〇、一九九六年）
・図録『定信と文晁―松平定信と周辺の画人たち』（福島県立博物館、一九九二年）
・種市悌三『三厩村誌』（三厩村役場、一九六二年、追刊一九七九年）
・『青森県の地名（日本歴史地名大系2）』「算用師峠」の項（平凡社、一九八二年）

（佐藤　良宣）

# 【2】蝦夷地図

写一軸

青森県立郷土館蔵（一六三八―一）

〔書名読み〕えぞちず
〔著編者〕古川古松軒（ふるかわこしょうけん）
〔写刊年次〕天明八年（一七八八）年頃
〔寸法〕縦一四〇・〇×横八七・〇糎
〔備考〕紙本着色

〔解説〕

本図は、古松軒が天明八年（一七八八）に幕府巡検使随員として蝦夷地を訪ねた際に製作した、本州北端部から蝦夷地・千島・樺太までの地図である。

本図の原図は、函館市中央図書館蔵『松前蝦夷地之図』である。もともと古川家に保管されていたが、後に函館市に寄贈された。その図の地図の部分は、天明八年八月、松前家の文庫にあった蝦夷地の絵図をもとに古松軒が製作したものである。

本図の図中にはかなりの分量の文章が書きこまれている。その文章の内容の多くは蝦夷地の地誌であり、松前渡海の様子、松前における交易、蝦夷錦の渡来、義経伝説、商船往来、等々である。それらは、古松軒が自ら百姓・町人から聞き出した庶民やアイヌたちに関する様々な情報が含まれている。本図のなかの文章だけを抜粋したものは、『蝦夷松前諸説』（函館市中央図書館蔵）として伝えられている。

当館所蔵の本図軸裏書には以下のように記されている。

古川古松軒製　蝦夷図
〇〇〇〇〇人古松軒古川平次郎兵衛カ天明八年巡検使藤澤要八等ニ従ヒ松前ヲ踏査シテ作ル所ノモノヲ寫シタルモノナリ
古松軒ハ天明年間幕府巡検使ニ同伴蝦夷地探検ノ為ニ福山上磯〇石等ヲ周遊シテ東遊雑記拾〇及松前蝦夷地圖等ヲ編述シタリ此圖ハ其孫タル古川二亀一氏所有ノ原図ヨリ寫〇スルモノナリ
（〇は擦り切れ、字が消えている部分）

右の文中の「平次郎兵衛」という名前は古松軒の通称である。これにより、本図が古松軒の孫（古川二亀一）の代に製作された写しであることがわかる。

本図は、蝦夷地（北海道）の形が南北に細長く描かれ、樺太もそれに対して極端に短く、千島は北東から南東に向かう列をなさず、米粒をばらまいたような一塊の島々となっているという、現在の北海道・樺太の地図とはかなりかけ離れたものになっている。これは、松前藩士や歴代の幕府巡検使等により、松前氏の国絵図からの書写で数多く流布し、幕末まで一般に利用された、国絵図系蝦夷図と呼ばれる系統の図にみられる特徴である。但し、他の国絵図系蝦夷図と比べると、ほぼ正方形かわずかに縦長に描かれている樺太が、本図では左側に傾いた平行四辺形となっている。また、岬や湾の出入りがかなり小さく描かれ、凹凸は他の図より少ない。また、古松軒が自ら調査した熊石から汐首岬の間には手が加えられ、正確さを増している。

古松軒が本図中でも多少言及しているが、彼がこの図の原図を描いた三年前の天明五年（一七八五）から翌年にかけて、幕府による東西蝦夷地の調査が行われた。その調査によって作られた蝦夷図は、蝦夷本島が、左端から渡島半島が突き出た菱型に近い形という、現在の北海道の地図に近づいたものにはなったが、本図は明らかにそれとは異なる。

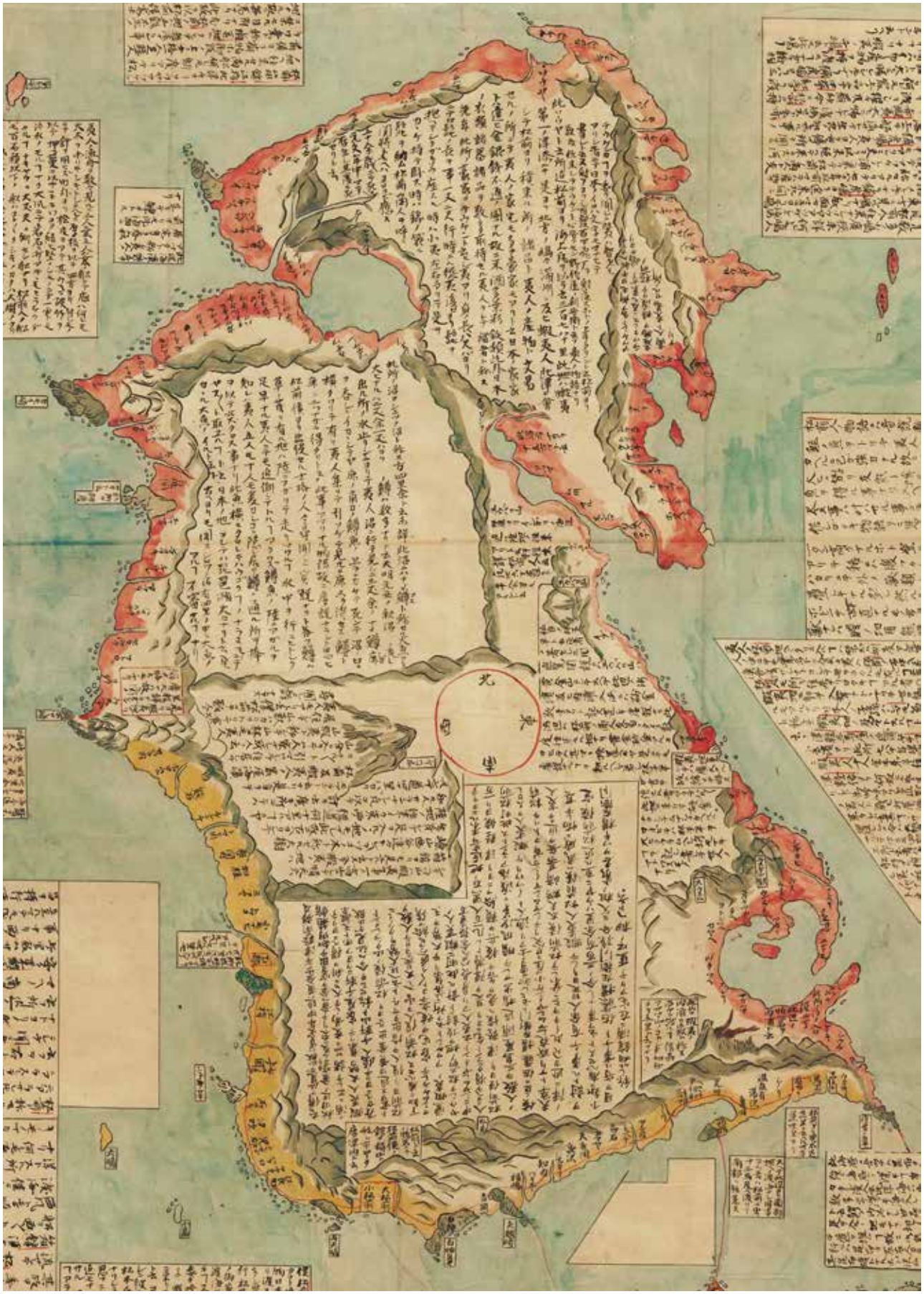
なお、本図の別図と言える関係の図は、三井文庫蔵『蝦夷之図』のほか、多数存在する。

古川古松軒は享保十一年（一七二六）、備中国下道郡新本村（現 岡山県総社市）に生まれた。名は辰または正辰、字は子曜。江戸中期の地理学者である。早くから蘭学を学び、宝暦七年（一七五七）、蘭方医となり、その後長崎で測量術を学んだ。磁石と歩測により、地図を製作する高い技能を持っていた。その地理的才能は当時の人々によく知られ、老中松平定信の下問を受けたこともあった。彼の著書『東遊雑記』は、前述の幕府巡検使随員であった頃の旅行記であるが、後に蝦夷地を調査した近藤重蔵が調査の際に現地に持参し、その記述が現実と寸分違わないことを高く評価している。本図のなかに書き込まれている文章と類似した内容は『東遊雑記』にもみられる。その他の著書には山陽・九州・瀬戸内の紀行文である『西遊雑記』のほか、『四神地名録』『信濃紀行』等がある。文化四年（一八〇七）没。

〔参考〕

・高木崇世芝著『近世日本の北方図研究』（北海道出版企画センター、二〇一一年）
・高倉新一郎編著『北海道古地図集成』（北海道出版企画センター、一九八七年）
・古川古松軒著・大藤時彦編『東遊雑記』東洋文庫二七（平凡社、一九六四年）
・『国史大辞典　第一一巻』「古川古松軒」の項（吉川弘文館、一九九〇年）

（佐藤　良宣）



# 【3】弘前并近郷之御絵図

写一鋪

青森県立郷土館蔵（一七五八―一）

〔書名読み〕ひろさきならびにきんごうのおんえず

〔著編者〕不詳

〔写刊年次〕貞享二年（一六八五）三月か

〔寸法〕縦三八六・〇×横三六五・〇糎

〔備考〕紙本着色

〔解説〕

弘前周辺の村、家並、街道筋、山野、河川等を描いた地図。植生・交通・土地利用・建造物・中世城館などの地理的情報を整理し、視覚化することを意識して製作された図であると考えられる。

図の中心には、弘前城は「御」の一字で示され、中央に配されている。城内については外郭のみが描かれ、その内部は描かれていない。それは、城郭内の建物に関する情報が機密に属するためであり、類例はよくみられる。また、城下については、町名等の注記はない。

図の東北隅にあたる部分には貼紙があり、次のような注記がある。

弘前并近郷之御絵図
壱分　六間
壱寸　壱町
三尺六寸　一里
道矩地幅大図皆応之
堂社人家之類者不応之
小道小川等細成物者除之
土手町升形より石川出口迄　壱里半
指渡
右同所より小杉村迄　壱里壱町
指渡
土手横町出口より千年山迄　三拾五町
指渡
右同所より一ノ渡迄　三拾壱町
指渡
新寺町出口より久渡寺迄　壱里九町
指渡
茂森新町出口より上湯口村迄　壱里半三町
指渡
新大工町出口より吉田町迄　壱里拾弐町
指渡
右同所より愛宕山迄　三拾五町
指渡
石渡升形より高杉村入口迄　三拾壱町
指渡
右同所より三千地村迄　弐拾八町
指渡
和徳町出口より藤崎入口迄　壱里拾七町
指渡
東西指渡　弐里半九町　壱里拾六町
南北指渡　弐里半拾弐町　壱里半
但松崎村より　兼平天神迄　但大和澤村より　三千地村迄
村数合百拾七ヶ村　枝村共

（緑）　此色者田
　　田畑分大図ニ仕候
（橙）　此色者畑
貞享二年乙丑年三月

この部分は図の凡例にあたると言える。これに従って、この図の表記について、以下に説明する。

この図の縮尺は、「壱寸壱町」、つまり、実際の一町が図上では一寸で表されることになるので、約三六〇〇分の一である。この縮尺は、道のり、土地の幅等には適用されているが、堂社や人家については適用されない。また、小道や小川など細かいものについては図上では標記されていない。

続いて、貼紙には、図の各地点間の道のり等が列記されている。このなかで「指渡」とあるのは直線距離のことである。注記の終わり近くには、この図の東西・南北の範囲とそれぞれ間の直線距離が示されている。これにより、弘前城からおおよそ一〇キロメートル四方の範囲が描かれていることがわかる。なお、東端が松崎村（現平川市松崎）、西端が兼平天神（現弘前市大字兼平）、南端が大和沢（おおわさわ）村（現弘前市大字大和沢）、北端が三千寺村（現弘前市大字三世寺（さんぜじ））となっている。この範囲にある一一七ヶ村が「弘前藩庁日記」（弘前市立弘前図書館蔵）等にみえる「弘前廻り」「弘前近郷」の範囲にあたる。貼紙の注記については以上である。

本図は、城下の描写については、「弘前惣御絵図」（延宝五年（一六七七）、弘前市立弘前図書館蔵）と基本的に共通しているが、「弘前惣御絵図」は、新しくできた街並みについて、元禄年間に追記されている。これに対し、本図は製作当時の状況を正確に反映しているとみられる。

本図の製作に関わる様々な情報については、国日記に記録がなく、注記もないので、製作経緯については不明である。

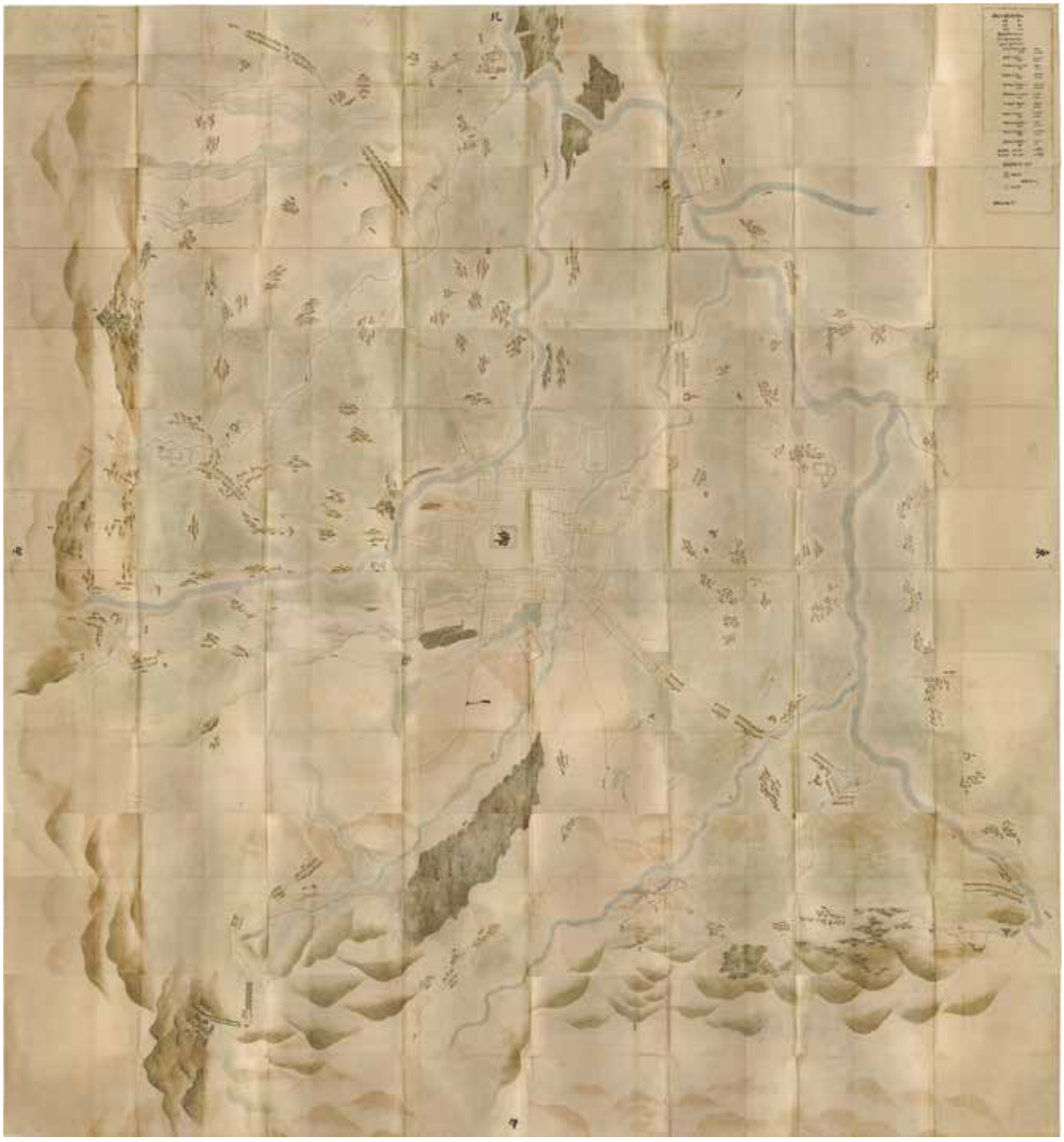
製作者についても不明ではあるが、天和二年（一六八二）に測量と地図製作の技術を見込まれて弘前藩の江戸藩邸に召し抱えられた金沢勘右衛門と清水九郎兵衛、あるいはその二人から技術を伝えられた藩士だったのではないかと推定されている。彼らは、第四代藩主津軽信政のもと、藩全体の地理的情報を総合的に把握しようという気運のなかで、前述の「弘前惣御絵図」のほか、領内の様々な絵図をも製作したとみられる。

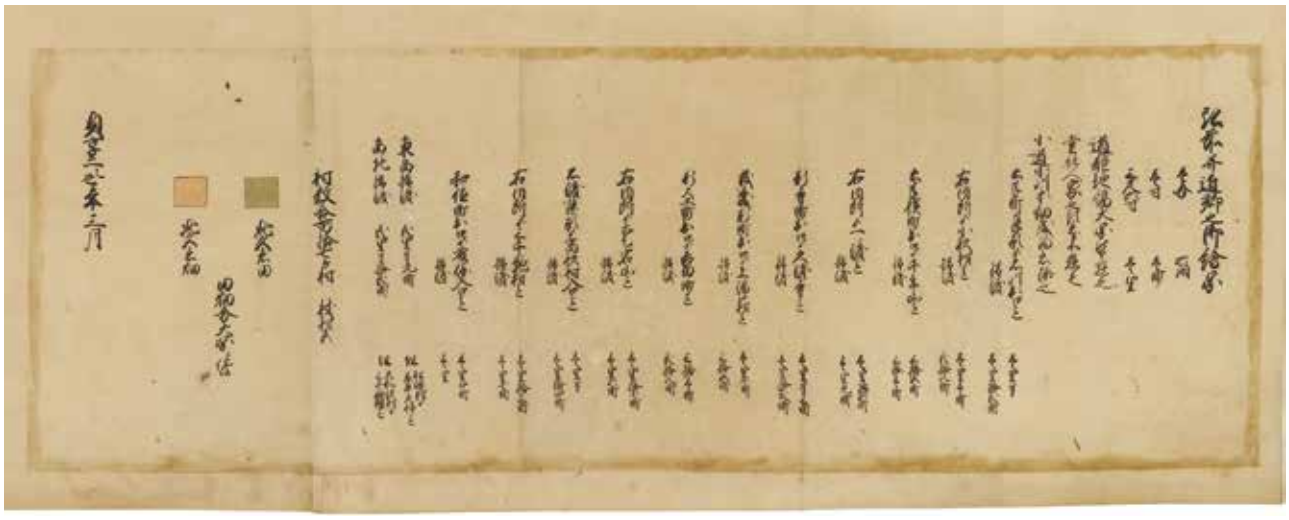
弘前藩が国元で絵図改めを行った際に製作された「御絵図目録」によれば、本図が元禄十六年（一七〇三）にはその下書とともに存在していたことが確認できる。また、同藩が天保三年（一八三三）に製作した目録によると、本図とその下書が弘前城二之丸御宝蔵に収蔵されていたことがわかる。

〔参考〕

・長谷川成一「津軽氏城跡の発達過程を探る基本資料の基礎的考察―『弘前并近郷之御絵図』と『天和書上絵図』―」（『平成一五年度～平成一七年度科学研究費補助金基礎研究（C）（2）研究成果報告書津軽氏城跡の発展過程に関する文献資料と遺物資料による研究』二〇〇六年）
・本田伸「弘前藩『御絵図目録』の発見とその意義」（『弘前大学国史研究』一一〇、二〇〇一年）
・『青森県史　資料編　近世2　津軽1』（青森県、二〇〇二年）

（佐藤　良宣）





御

# 【4】南部津軽松前濱通絵図

写一鋪

青森県立郷土館蔵（一九六四―一）

〔書名読み〕なんぶつがるまつまえはまどおりえず

〔著編者〕米沢藩岩瀬家（岩瀬三左衛門政辰）

〔写刊年次〕文化五年（一八〇八）

〔寸法〕縦一三二・〇×横一二三・〇糎

〔備考〕紙本着色

〔解説〕

本絵図は、文化五年（一八〇八）に米沢藩絵図方である岩瀬家（岩瀬三左衛門政辰）によって描かれた絵図の副本、または写しである。描かれた範囲は、箱館周辺とそこから松前に至る海岸沿い、ならびに松前城下、津軽海峡を挟んで津軽領の津軽半島の龍飛（たっぴ）、三厩（みんまや）、今別から青森、そして野辺地（のへじ）に至る地域である。描かれている内容は、村名と家数、河川名とその特徴、沿岸部の岩礁等の地形と名称、橋・街道、青森・三厩と松前・箱館間の航路とその距離・出航湊、津軽海峡中央の流れの強い潮流などの詳細な情報であり、当時の蝦夷地警備御用のための情報をまとめたものと考えられる。

本絵図には同名、かつ、同内容・構図の絵図が複数存在している。そのうち市立米沢図書館の岩瀬家文書には本絵図と大きさがほぼ同等の絵図（岩瀬家文書六九七　縦一三一・九×横一二四・七糎）と、大判の絵図（岩瀬家文書六九八　縦二一二・七×横二〇一・一糎）が収められており、この大判の絵図が正本として作製され、正本をもとに本絵図のような小判の絵図が副本・写しとして数枚描かれたと考えられている。

岩瀬家は米沢藩の絵図方の家である。もとは陸奥国岩瀬郡須賀川の武士で、初代の藤左衛門正清が天正七年（一五七九）に伊達家に、後代には米沢藩に仕えたとされる。その後小右衛門政秀が承応二年（一六五三）に召し抱えられたのち、藩命により二度にわたって西国・中国・北国（西日本や北陸）の調査を実施し、そのころに絵図方に任命されている。岩瀬家はその後代々絵図方を勤めるとともに、藩命による各地の調査・情報収集、幕府との交渉役を担うなど、政治的にも重要な役割を果たしたとされる。

天明三年（一七八三）に家督を継いだ三左衛門政辰は、一八世紀末ころから活発化した蝦夷地周辺へのロシア船の接近・来襲事件と、それに伴う東北諸藩の蝦夷地警備動員を受け、聞き繕（きつくろ）い御用（ごよう）（情報収集のこと）のために文化四年（一八〇七）に秋田の酒田に、翌文化五年には箱館に派遣された。そして二ヵ月間の調査を終えて米沢に帰国後、調査結果を絵図にするよう命じられ、米沢から蝦夷地への渡海港・三厩までの工程記十二通、南部・津軽の浜通りより松前・箱館絵図十通など、膨大な数の絵図を同年のうちに作成した。米沢藩で作成された絵図類を記載した「御絵図目録（おんえずもくろく）」などの資料には、

「一、南部津軽松前浜通絵図　一枚
一、米沢中山より津軽三厩迄絵入り道中記　一冊
一、道中略絵図　一枚
一、蝦夷絵図　一枚
右は、文化五年中、松前・箱館聞繕仰付けられ差戻り候上相仕立て差上げ候控」

といった記載があり、本絵図もこの時期に三左衛門政辰によって作成されたと推測される。

記述・描写内容に関しては、まず南部領についての記載が省略されている特徴がある。南部領の部分は薄紫色に彩色され、南部領下北半島の佐井から箱館に至る海上航路は示されているものの、佐井と野辺地間には距離が「二十七里拾壱町」と記された、途中で途切れる街道が引かれ

ているのみで、街道沿いの詳細は描かれていない。また、同じ南部領の野辺地から蝦夷地へ向けての航路の記載もない。

一方、中央部の津軽海峡には、西から東への流れの強い三本の潮流として知られた「白神潮（しらかみのしお）」・「中潮（なかのしお）」・「龍飛潮（たつぴのしお）」が細かく描かれており、さらに絵図左端に「此三潮東流事太急也」との記述もある。現在も流れの強さ・うねりの大きさが有名な津軽海峡の潮流を難所として示している。

松前城下や箱館周辺には「会津勢」・「南部勤番所」・「津軽勤番所」・「仙台勢詰」などの図示や、文化四年（一八〇七）の佐竹秋田藩出兵に触れた注記もあり、東北諸藩の蝦夷地警備の様子が詳細に記されている。その他沿岸各地に陣屋・遠見番所・大筒小屋（砲台）、蝦夷地では箱館の町入口の桝形や湾内の築島が図示されている。

津軽領では「津軽越中守番所」・「津軽三十郎番所」などの弘前藩・黒石藩の拠点とともに、御仮屋が置かれた青森の町並みが特に詳しく描かれ、四ヶ寺のような建物群や「城代」の文字、青森と油川（絵図内では大濱と表記）から弘前城下への城下道などがみえる。また、一部の村名には「上」・「中」・「下」の一文字が朱色で注記されている。

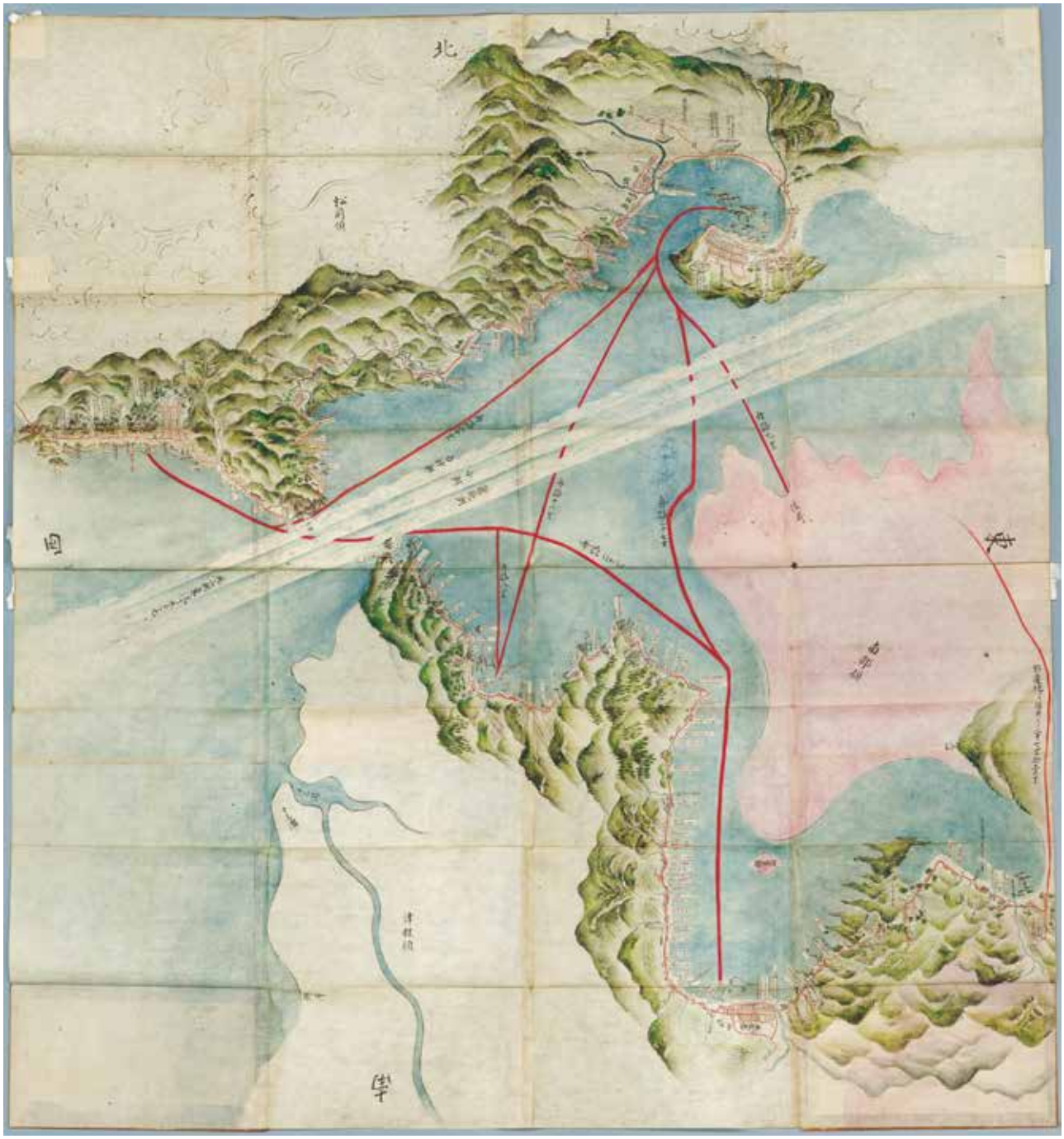
各地の河川には実際の名称ではなく、「堀立川（ほったてがわ）程ノ川」の表記をはじめ、「羽黒川（はぐろがわ）」・「犬川」など、米沢の地と関連のある河川名を記してその規模等を表現する方法も取られている。

本絵図は、絵図方を勤める人物による実際の踏査に基づいた記述・描写が行われ、詳細で写実性に富んだ内容となっている。

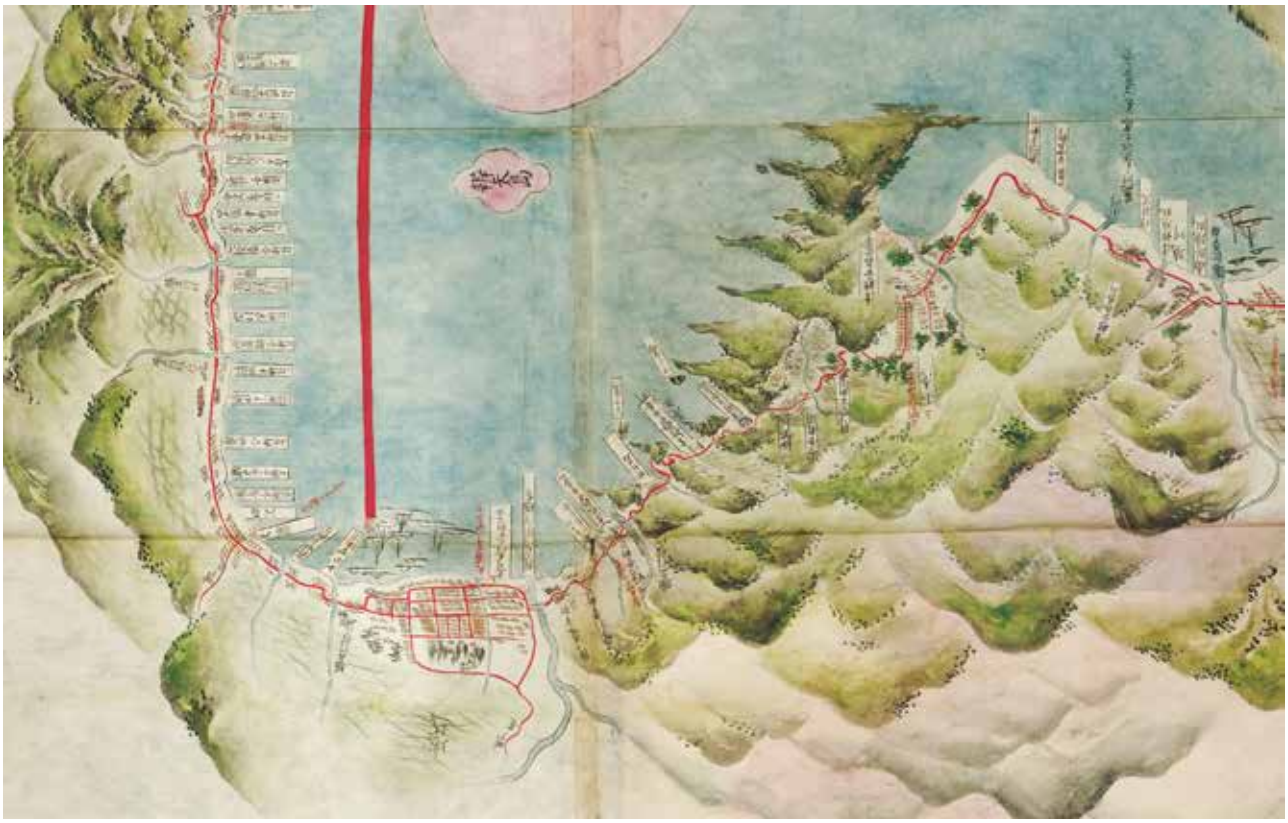
（滝本　敦）

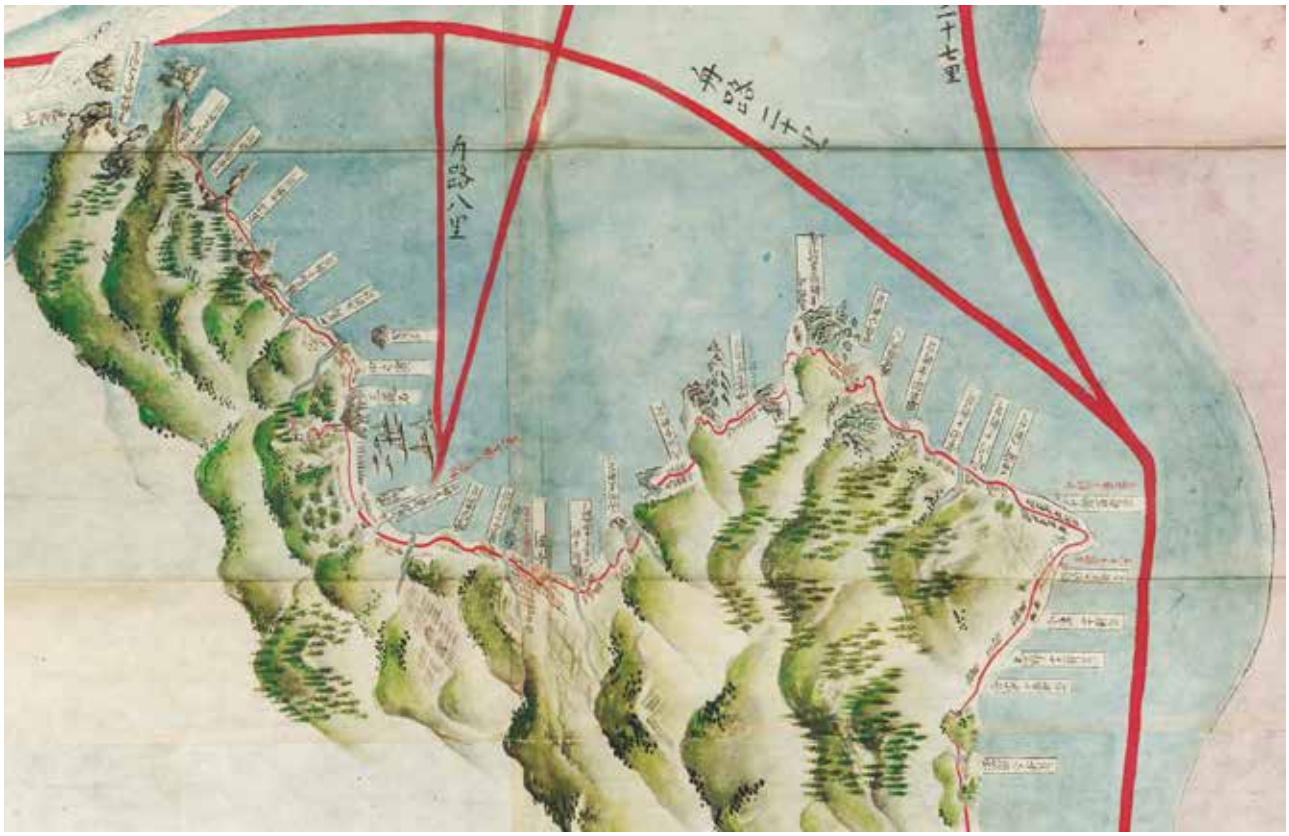
〔参考〕

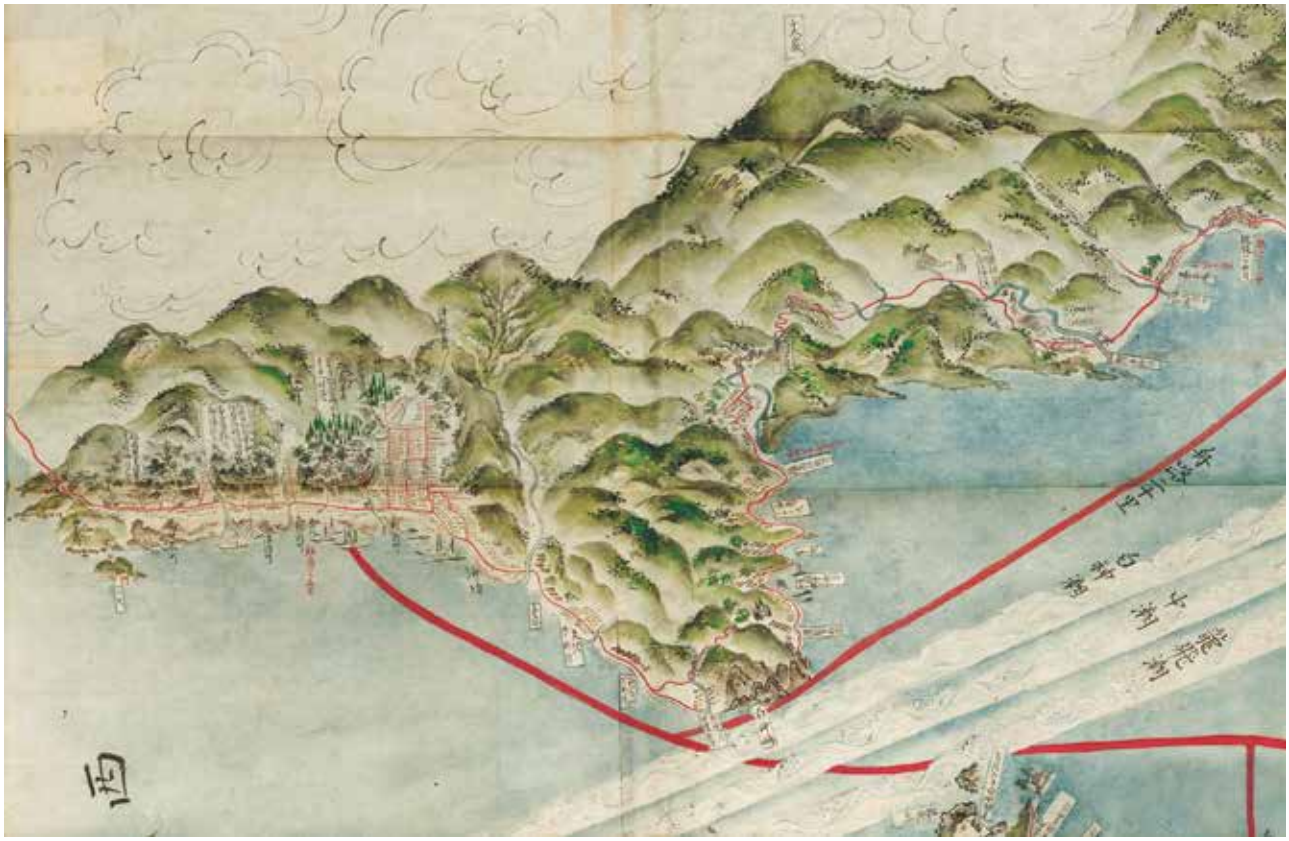
・長谷川成一・鳴海秀・三上強二「平成十七年度郷土館購入資料に関する所見」（『青森県立郷土館調査研究年報』三〇、青森県立郷土館、二〇〇六年）
・川村博忠『近世絵図と測量術』（古今書院、一九九二年）
・朝倉有子「御用絵師と絵図編纂」（米沢市立上杉博物館編　特別展【絵図でみる城下町よねざわ】図録（米沢市立上杉博物館、一九九二年）
・『函館市史　史料編第一巻』（函館市、一九七四年）
・『函館市史　通説編第一巻』（函館市、一九八〇年）


北

北







# 【5】陸奥国津軽郡之絵図

写一鋪

青森県立郷土館蔵（一五九四―一）

〔書名読み〕むつのくにつがるぐんのえず

〔著編者〕未詳

〔写刊年次〕貞享二年（一六八五）三月二十六日

〔寸法〕縦三九三・〇×横四八八・〇糎

〔備考〕・紙本着色

・絵図の余白に

「高壱万九千弐百六拾五石六升

（黄色の小判型図）　此色ハ平賀郡

高壱万千三百七拾六石五斗七升

（薄紫色の小判型図）　此色ハ田舎郡

高壱万四千三百五拾八石三斗七升

（赤銅色の小判型図）　此色ハ鼻和郡

三郡高合四万五千石」との石高の記述あり。

・木箱付属。縦六九・〇×横三八・五×高六糎。蓋表面に「貞享二乙丑年　津軽郡之絵図」の文字。蓋表面に紙片二枚貼付。一枚は「巻物　八八」の文字。もう一枚は文字判読不能。

・**端裏書に**「陸奥国津軽郡之絵図　正保二乙酉年十二月廿八日差上　御公儀候控之写也　貞享二乙丑年三月廿六日」とあり。

〔解説〕

本絵図は、裏書に「正保二乙酉年十二月廿八日差上　御公儀候控之写也　貞享二乙丑年三月廿六日」とあるように、弘前藩が正保二年（一六四五）に幕府に提出した、いわゆる正保国絵図の控図（ひかえず）を、貞享二年（一六八五）に写したものである。

幕府に納められた全国各地の正保国絵図の正本（＝清絵図（きよえず））は、明暦三年（一六五七）に発生した明暦の大火などにより失われ、現存していない。しかし、その正本と同内容で作成された控図は国元や江戸藩邸に公式文書として置かれた場合が多く、作成途中の下図とともに、国絵図正本の実態を知る上で重要なものであり、また、控図の写し等も同様であるといえる。

幕府に提出した正本と、その控図を写した本絵図の関連性について確認してみると、まず、本絵図の記載内容や描写方法が、正保国絵図の作成に関して幕府が示した作成基準に基づいていることがわかる。また、国絵図と同時に作成・提出された交通情報に関する書き上げである「道帳（みちのちょう）」と照合することでも、正本との関連性をみることができる。弘前藩が慶安二年（一六四九）二月に作成した「津軽領分大道小道磯辺路并船路之帳（つがるりょうぶんおおみちこみちいそべみちならびにふなじのちょう）」（弘前市立弘前図書館蔵　八木橋文庫）が、正保国絵図とともに幕府に提出された「道帳」の控えの一つとされているが、その道筋等の記述内容と本絵図の内容は一致するという。

以上のことから、本絵図と失われた正本は、その記載内容・描写方法が同様であり、正本を忠実に写したものと位置付けることができる。

江戸幕府による国絵図の事業は、大きく、慶長・正保・元禄・天保の四度行われたが、正保期は全国的に実施されるとともに、作成基準や描写方法も全国的に統一することが図られた。作成基準の主な内容は、①国絵図を二通作成して幕府に納める、②郡の区分をして、村ごとの石高を記入する、③道筋の縮尺は六寸一里（二万千六〇〇分の一）とし、一里山を描く。また、一里山がない場合は三十六町（一里）間隔で一里山を図示する、④本道は太く、脇道は細く、ともに朱線で描く、⑤一里山と郷村間および国境の道のりを記入する、⑥渡河地点には、渡河方法、河幅、水深を記す、⑦本道で冬に牛馬の通行ができない箇所には、その

ことを注記する、⑧山木・海・川などには彩色する、などであり、特に交通情報を詳細に盛り込むことが重視された。また、海路・海岸に関することも別に指示が出されており、航路、岬名・湾名、湊での舟の停泊状況、潮や風向きによる舟の出入りの良し悪しなどを記すこととなった。幕府はこれらの基準を示しつつ、さらにその正確さを期すため、清書の前に下図を江戸に運ばせて点検を行うなど、統一性を徹底した。

本絵図も、このような作成基準や描写方法に従って描かれており、一七世紀前半の津軽領の地形や海岸線、一つひとつの山川湖沼・小島・寺社・番屋・鉱山・港湾・陸海路・一里山等の姿や位置を詳細に知ることができる。また、村名・村高、各地の海岸に書き入れた注記等の情報などは、極めて貴重な歴史資料である。

本絵図の主な特徴・具体的内容として、まず、領内の「平賀郡」・「田舎郡」・「鼻和郡」の三郡を区分して、その郡界を太い黒線で表しており、寛文四年（一六六四）の朱印改によって三郡から「津軽郡」一つとなる前の状態が描かれている。また、各郡内の郷村の位置を表す着色した小判型も、絵図余白の注記のように「平賀郡」は黄色、「田舎郡」は薄紫色、「鼻和郡」は赤銅色に色分けされている。

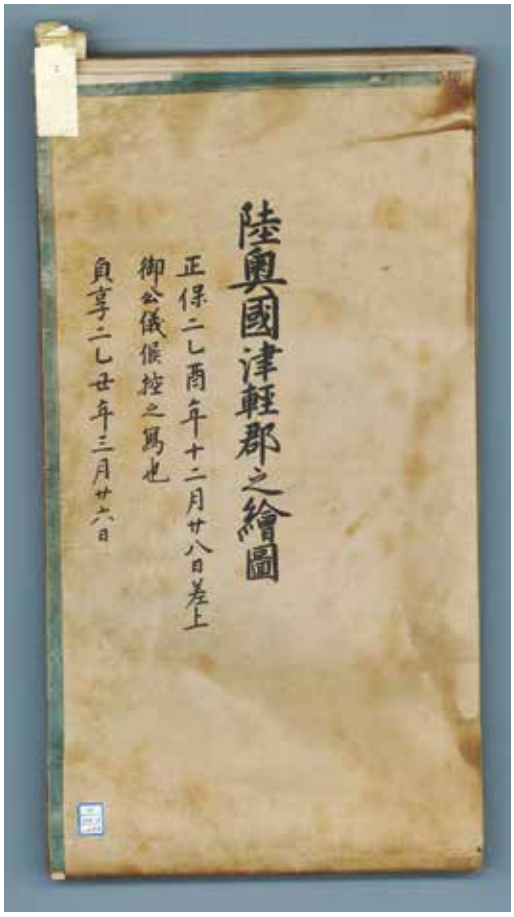
陸路については、各道筋を区分して三種類の太さの朱線で示されており、奥州街道のような主要な道は最も太く、脇街道のような領内の幹線道は次に太く、各村をつなぐ道は最も細い線となっている。一方海路については、絵図の北方向の場所に松前領の南端を描き、朱線で松前領への航路をしっかりと示すとともに、その距離も記載している。海岸部では、岩礁の位置や姿を詳しく描写するとともに、「遠見番屋」も図示している。この「遠見番屋」は、津軽半島に九ヵ所（うち一部文字注記なし、または「遠見矢倉」の注記）、南部領との藩境付近にあたる狩場沢村近くに一ヵ所示されているが、他国の正保国絵図でも同様に図示されている場合が多い。その背景には幕府による寛永十六年（一六三九）のポルトガル船来港禁止と、その後の海岸部の警戒・防備体制の掌握が関係しているとされる。

その他、他の正保国絵図との違いなどとしては、城地の描き方があげられる。多くの正保国絵図では城地を「□（太い黒線の四角形）」で表現しているのに対し、本絵図では弘前の文字を「〇（太い黒線の丸）」で囲み、下地を黄色で彩色している。また、他の正保国絵図でみられない最大の特徴ともいえるのが、領内でアイヌが居住する集落を「狄村」と表記している点で、その数は夏泊半島で三ヶ所、津軽半島で二ヵ所の計五ヶ所である。ただ、その他の村々とは異なり、村名や村の石高、ならびに着色した楕円型は表記されていない。

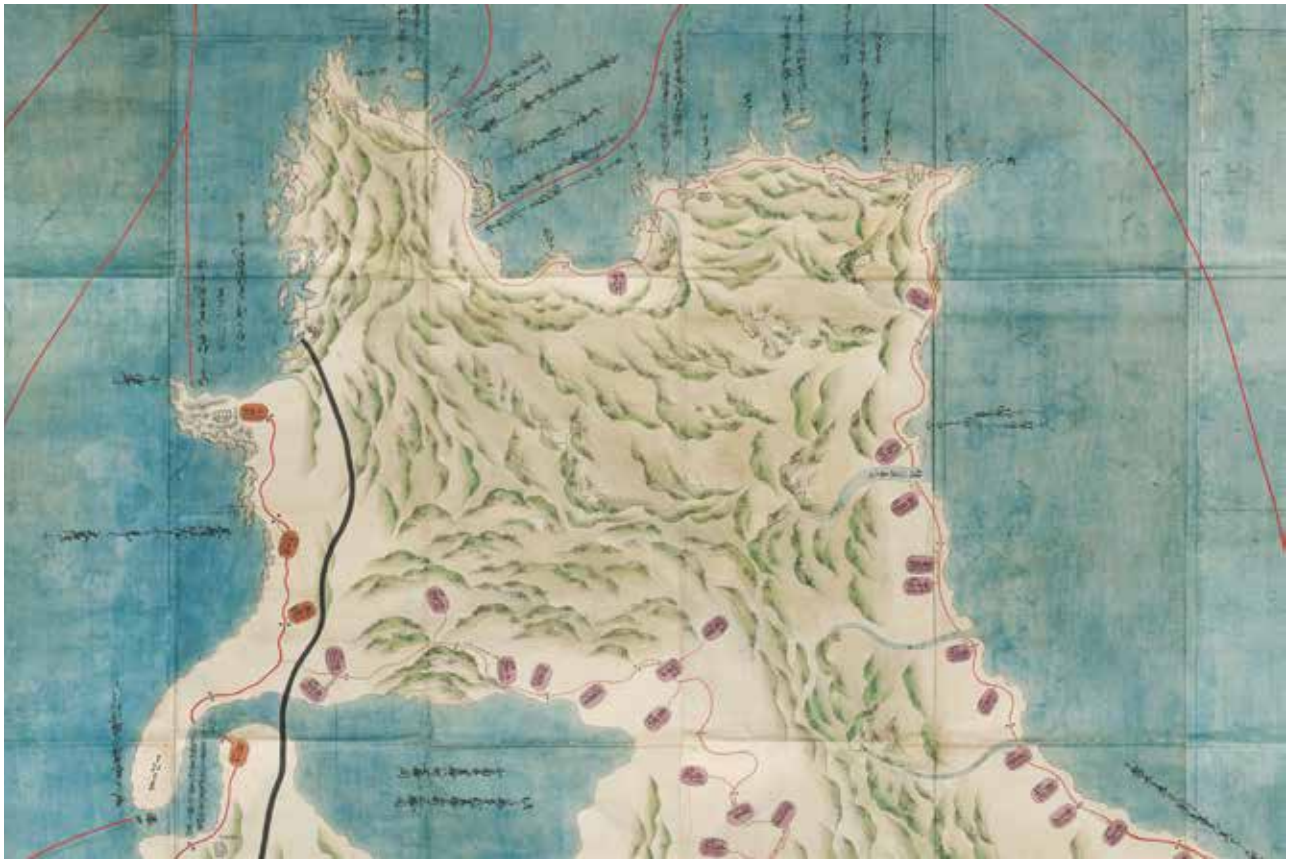
弘前藩が貞享二年の時点で本絵図を作成した理由ははっきりと分かっていないが、正保国絵図の正本も控図も失われたなかで、公的に作成した国絵図としては現存する最古のものであり、津軽領全体を描いた絵図としても、最古級のものである。

〔参考〕


・川村博忠『国絵図』（吉川弘文館、一九九〇年）
・川村博忠『江戸幕府の日本地図　国絵図・城絵図・日本図』（吉川弘文館、二〇一〇年）
・福井敏隆「〈史料紹介〉慶安二年（一六四九）二月成立の「津軽領分大道小道磯辺路并船路之帳」（弘前市八木橋文庫蔵）」（『弘前大学國史研究』七五、一九八三年）
・『新編弘前市史　通史編二（近世二）』（弘前市、二〇〇二年）
・北東北三県共同展実行委員会編『描かれた北東北　北東北三県共同展』図録（北東北三県共同展実行委員会、二〇〇四年）
・青森県立郷土館編　特別展『描かれた青森』図録（青森県立郷土館、一九九九年）



（滝本　敦）



# 【6】黒石温泉郷絵図

青森県立郷土館蔵（一九六五―一）　写一巻

〔書名読み〕くろいしおんせんごうえず

〔著編者〕未詳

〔写刊年次〕明治三年（一八七〇）八月

〔寸法〕縦二四・三×横二二二・〇糎

〔備考〕・紙本着色

・和本仕立て用に折り目をつけた紙を貼り合わせて巻子にした形跡あり。

・各場面の間に折り目があり、「〇（赤丸）　山形筐蔵」と記す。

・蔵書印など、次の複数の印影あり。

①絵部分の最初と最後の上端・下端に「津軽　弘前　□長（□の中に「長」）　三國屋」の丸印（黒色）。

②絵部分の最後、ならびに裏面に「本〇（〇は「甲」カ）　三國屋」の丸印（茶色）。

③絵部分の最後に方形印（茶色）。文字は判読不能。

④各紙の継ぎ目の下端に六角印（黒色）。上部半分のみ押印。文字は判読不能。

〔解説〕

かつて山形温泉郷ともよばれた、黒石温泉郷各地の風景画を貼り連ねた絵図（絵画）である。作製年代は明治三年（一八七〇）八月と記されているが、作者は不詳。描かれた風景は全部で七場面からなり、各場面冒頭には順に「自蛾虫坂眺望板留村之図」、「自蛾虫坂黒森を見る」、「落瀧之図」、「二庄内温泉之図」、「毛内村筏橋之図」、「テンカヒラ舩山之図」、「向沖浦温泉之図　川浪最荒シ」の題名が記されている。

黒石城下から現在の平川市葛川あたりまでの浅瀬石川沿いの道筋（山形路、山形通）周辺には、温湯、板留、二庄内、沖浦といった出湯場（温泉場）や、中野村の不動堂・紅葉山などの景勝の地が各地にあり、古くから人々に親しまれた。

各出湯場は、元禄四年（一六九一）作製の『黒石御絵図』に「出湯有」と表記されるなど、諸史料でも記録が残っている。湯宿も設けられ、湯治客の数も多く、「二庄内温泉之図」では湯小屋で湯につかる人々がみえる。また、特に温湯は津軽郡中に名湯として広く知られ、藩政期には黒石藩の宗藩である弘前藩の藩主たちも入浴に訪れている。

一方、山形村の蛾虫坂は浅瀬石川北岸の断崖の上を通る峠の坂道であったが、その頂上から望む風景は絶景であり、本絵図でも二場面がおさめられている。「自蛾虫坂眺望板留村之図」では坂を上り、頂上から風景を眺める旅人風の人物が描かれている。また、落し瀧は津軽の名所の一つとされており、両岸が岩石で挟まれ、落差のある岩盤を水が連続して激しく流れ落ちる特徴があり、「落瀧之図」ではその流れの様子が表現されている。

本絵図は、風景とともに地元の庶民、旅人、湯治客などを細やかな筆で描いている。木々や家屋の屋根等に薄墨、人の手足・顔、岩や家屋の壁に肌色または薄朱色を彩色しているのみだが、黒石地方を描いた近世絵画は珍しく、温泉と景勝の地という題材からも貴重な作品である。

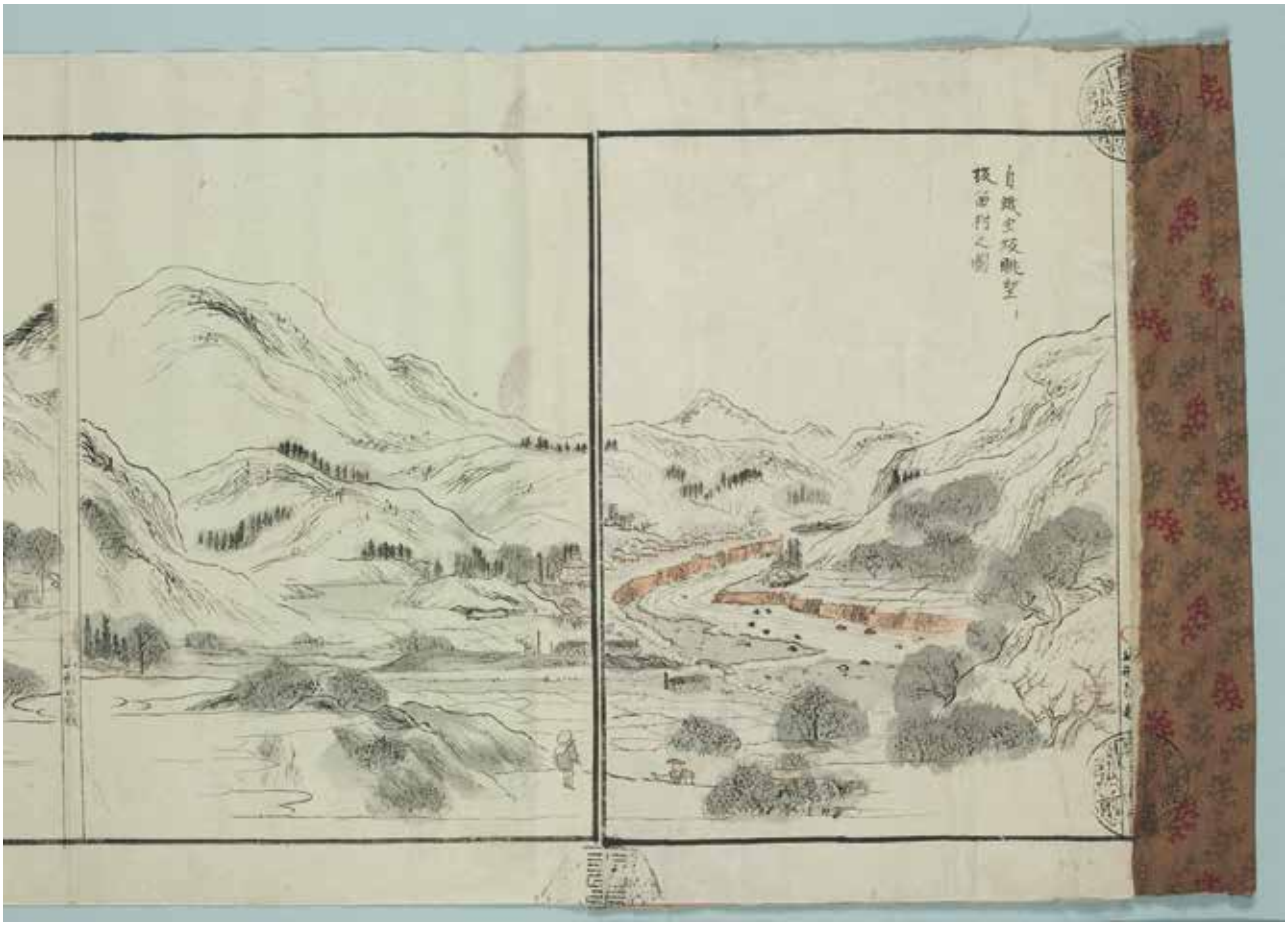
なお、本絵図と同様の作品が『黒石市史　通史編一』（黒石市、一九八七年）や山上笙介『ふるさとのあゆみ　黒石』（津軽書房、一九八一年）などでも掲載されており、そこでは作者が山形岳泉（一八五二～一九二三）であると紹介されている。山形岳泉は弘前藩士の家に生まれ、同じ弘前で活躍した日本画家の平尾魯仙（一八〇八～一八八〇）に弟子入りし、師の魯仙の作品を忠実に模写し、優れた作品を残している。本絵図と前掲の各書籍掲載の絵図が同一のものか判然と

しないが、本絵図の各場面の間に和本の小口のように折り目がついており、その部分に「〇（赤丸）　山形筐蔵」と記されていることから、本絵図が山形岳泉と何らかの関係性がある可能性も考えられる。

〔参考〕

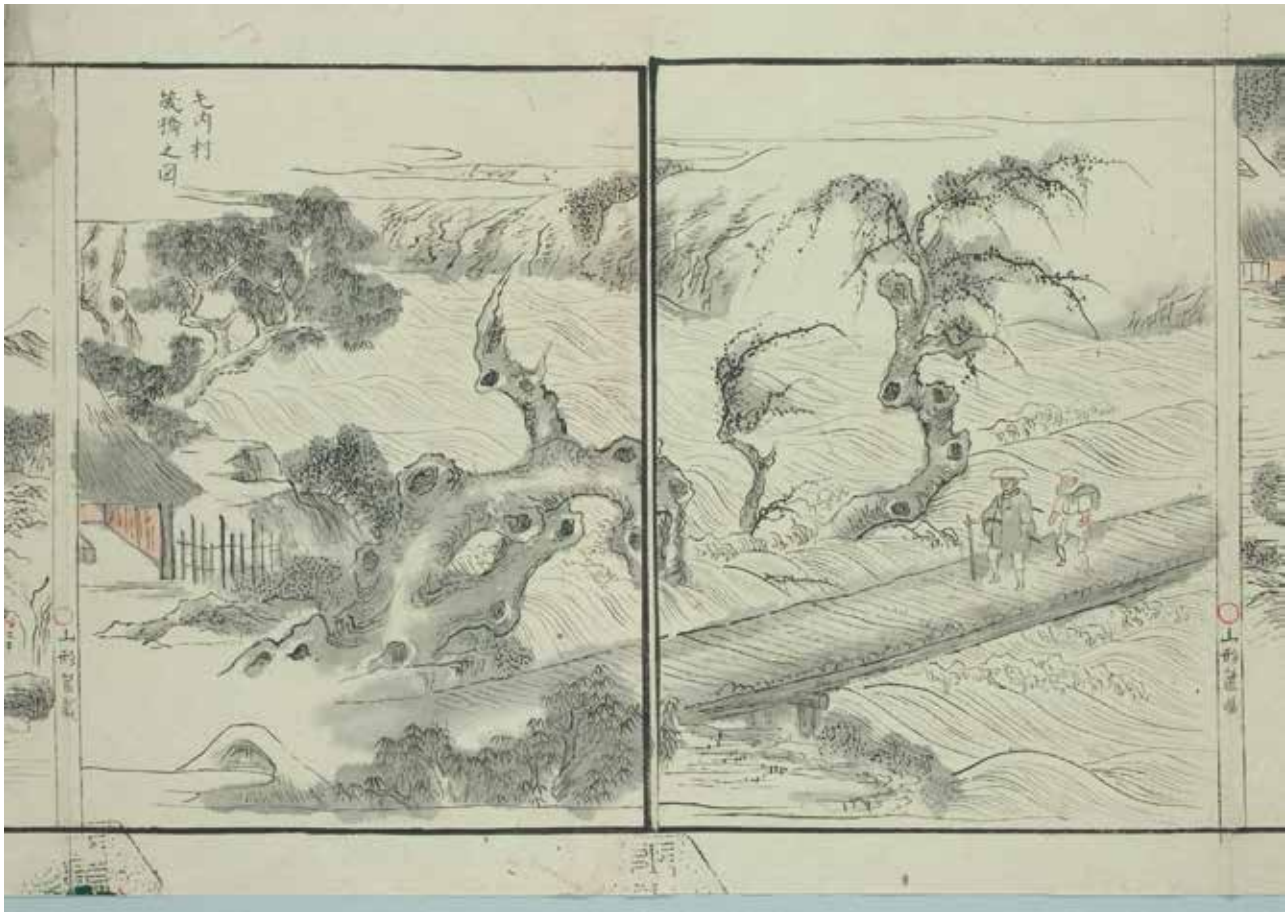

・『黒石市史　通史編一』（黒石市、一九八七年）
・『青森県「歴史の道」調査報告書　黒石・山形街道』（青森県教育委員会、一九八四年）
・中畑長四郎『津軽の美術史』（北方新社、一九九一年）


（滝本　敦）



落雁之図

二庄内
温泉之図



黒石温泉郷絵図

# 【7】外浜奇勝

写一冊

青森県立郷土館蔵（二二二八―一）

〔書名読み〕そとがはまきしょう

〔著編者〕菅江真澄（すがえますみ）

〔写刊年次〕江戸時代（一八世紀末）

〔寸法〕縦一九・二×横一三・八糎

〔丁数〕一〇四丁　七九図

〔備考〕題簽に「外浜奇勝　合冊　全」の墨書。表紙裏に「此のふみは白井秀雄うしか津軽の山海を経回りたる紀行にて、はからすも予（三谷句仏）か手に落つ。ことし庚子（天保十一年、一八四〇）の冬中秋、山鹿君玉翁大江戸に帰り給ふにより、此書をはなむけとし、くぬちの山海、此書にことごとくあるをみ給はば、みちのくのわすれす山わすれされと也。かの秀雄うしは、秋田侯の国学士となりて真澄と呼ぶ。実は参州の産なりけり」の書き付けがある。巻頭に蔵書印と「口文庫」の朱書、巻末に朱印。裏表紙の内側に「弘前三栄堂そとが浜風拝」の署名がある。

〔解説〕

著者菅江真澄（以下、「真澄」と記す。）は、生涯のほとんどを旅に暮らし、数多くの紀行・日記を残した。本名は白井秀雄（しらいひでお）、宝暦四年（一七五四）三河国（現在の愛知県）に生まれ、文政十二年（一八二九）出羽国（現在の秋田県）角館で逝去した。天明三年（一七八三）に真澄は故郷を出立、三〇歳のときであったとされる。行路は現在の長野県、新潟県を経て東北地方へ入り、さらに津軽海峡を渡り北海道にまで至った。滞在した先々では、地元の医学者や歌学の仲間などいわば知識層との交遊に時を過ごす一方、船頭や馬方、宿の家人らから情のある対応を受けた。土地の景観・木石・旧跡・神祠・習俗などに関心を寄せ、山中深く分け入って実地踏査にも赴いた。そして旅中見聞した諸事は日付を入れた日記形式の文にし、ときには写実的な絵図を描いた。それらは江戸時代後期の北日本の景観や庶民の暮らしぶりなどを知ることができる貴重な記録であり博物誌でもあるといえよう。

津軽領内に真澄は三度訪れ合わせて九年ほど在住しており、滞在期間の長さでは終焉の地秋田領に次ぐ。「外浜奇勝」は真澄が津軽領内に滞在したときに書いた寛政八年（一七九六）六月から七月までと、同十年（一七九八）三月から七月までの日記の文・絵図を綴じて一冊としたものである。真澄がたどった行程ごとに仕切り紙が入っており、寛政八年六月一日に弘前を出発し、津軽半島の日本海側突端にある小泊を目指し、その後は南下して鰺ヶ沢に到着するところまで、次に日本海沿いの秋田領に近い深浦から七月十六日に出発し同月二十三日に藩境の関所がある大間越のところまで、最後は寛政十年三月半ば過ぎに南部領に近い平内を出発し弘前に滞在の後、五月十二日に薬草探索のため岩木川沿いに上流を目指し、岩木山麓の南から西側の調査、その後は海岸沿いに南下して、ところどころの川の上流に分け入りながら深浦に着き、七月九日再び北上し鰺ヶ沢の赤石川上流を目指そうとするところまでとなっている。

記された内容のうち民俗研究の上で印象深い事例をいくつか紹介する。寛政八年と十年の両年とも春から秋にかけての旅である。この季節の津軽各地では、田植え後のサナブリ休みから盆までの期間に、ムシ送り、ネブタ、産土様の祭り、死者供養など民俗行事が次々に行われる。真澄も津軽の気候と風景の中で、ところどころで民俗行事に出くわす。六月二十九日に十三湖からつがる市富萢に入る手前で、田の水口（みなくち）にワラで作った様々なムシの形代（かたしろ）が枝に掛けられているのを見る。七月六日に

はつがる市大館で数多くの人の形代、ムシの形代を手に持ち、紙幡（かみばた）を風に吹かせ太鼓、笛、鉦、ほら貝の囃子（はやし）で戯れ舞い、田んぼを練り歩く様子や太刀で切り払う所作があることを記す。これらの事例を「虫（むし）おくり」と記しており、現在のムシ送りの行事名称は江戸時代後期から継続していることが確認できる。一方、津軽の「ムシ」は竜蛇の形が特徴的であると解説されるが、それが真澄のころもそうであったのかは絵図がないため不明である。ムシ送りにほら貝が楽器として使われていることや紙幡をたなびかせることは、現在確認が難しい事例であろう。津軽のムシ送り行事では農耕儀礼や音楽・舞踊が集約して披露される特色があり、真澄が見たムシ送りにも同様の特色が窺われる。

現行のムシ送りは田植えに合わせ六月に行われている。ネブタは新暦八月七日前後に行われ、盆行事は新暦八月十五日を中日にして行われるのが一般的である。「外浜奇勝」では寛政八年七月四日から六日につがる市木造から鰺ヶ沢にかけてねぶた流しを真澄は目にしており、同じ期間にムシ送りのことも記している。同十年七月七日では深浦町驫木において夕暮れネブタ流しを見、娘たちは盆踊りを踊り始め、夜遅くまで賑やかにしていると記している。ムシ送り行事とネブタが同時期に行われ、それから直ちに盆行事に移行していくという行事の連続からは、夏の夜を楽しもうとする当時の庶民のエネルギッシュな様子を窺うことできる。

寛政八年七月二十一日夜、真澄は深浦町大間越で男たちが三匹獅子踊を舞い遊んでいる様子も記している。この民俗芸能は現在、県無形民俗文化財に指定されており、盆の十五、十六日の先祖供養のための墓踊りを活動の主なものとしているが、真澄は豊作祈願のための踊りとしており、獅子踊が担う役割の多様さも確認できる。

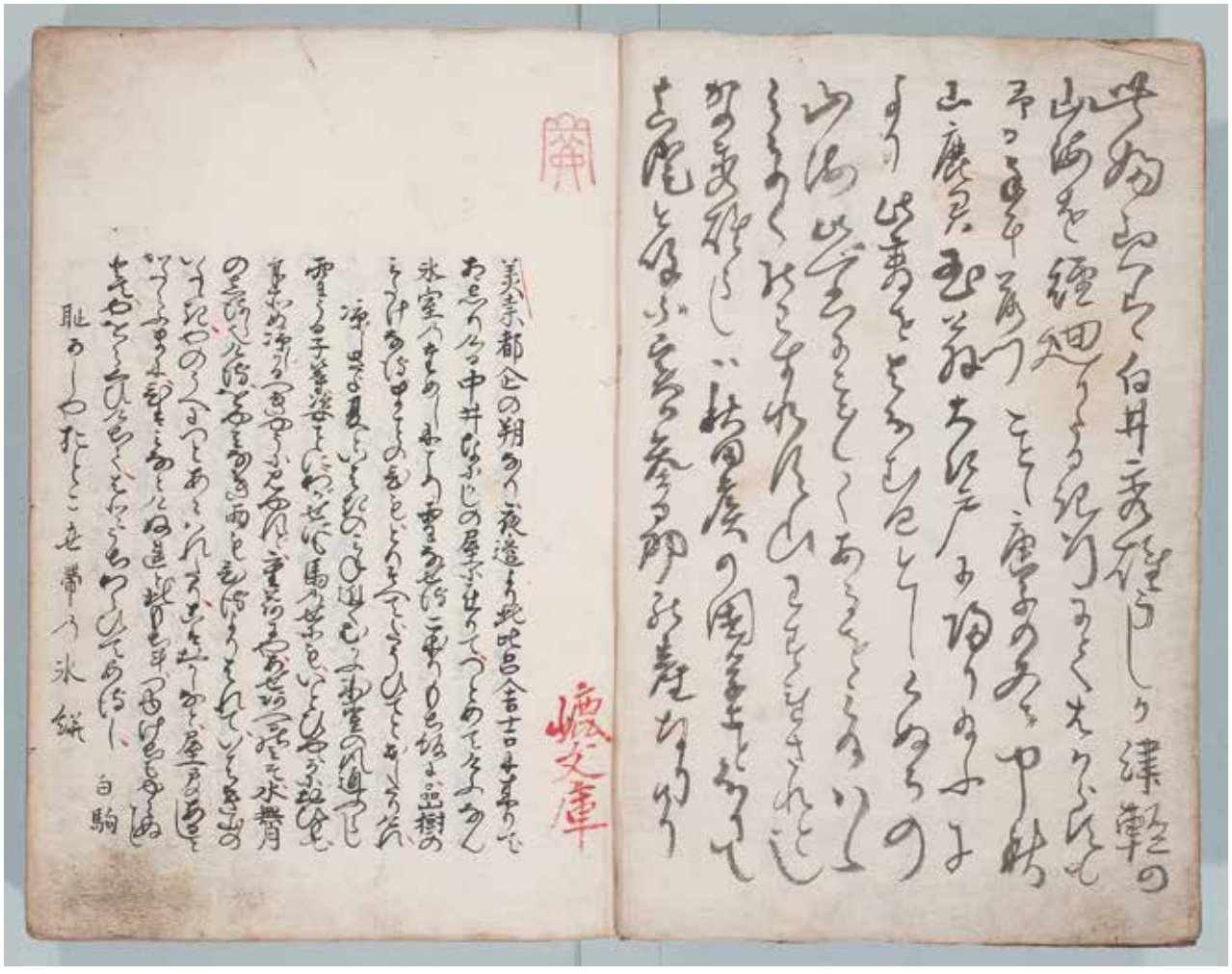
表紙の書き付けの内容と裏表紙の署名から、本資料は真澄が書き残したものを「三栄堂そとがはま風」（弘前の俳人・三谷句仏　一七九四～一八六七）が入手し、その後弘前藩士山鹿玉翁（山鹿高厚）が天保十一年（一八四〇）に江戸に帰る際に、津軽滞在の記念として餞（はなむけ）に贈ったものであることが解る。合冊し「外浜奇勝」と題したのは三谷句仏本人と推定されている。大正十一年（一九二二年）に東京神田の古書店に出ているのを青森市の佐藤蔀（しとみ）（一八五二～一九四四、郷土史研究家。考古遺物や植物の写実的な絵図を数多く残した。）が入手、その後同市成田彦栄（ひこえい）（一八九八～一九五九、医師。考古資料・歴史資料等を収集。文化財保護に尽力した。）の手に渡った。平成二十四年三月、成田彦栄御家族の成田惠子氏より青森県立郷土館に寄贈された。平成二十六年四月二日、「菅江真澄筆「外浜奇勝」」の名称で青森県の県重宝（歴史資料）に指定。

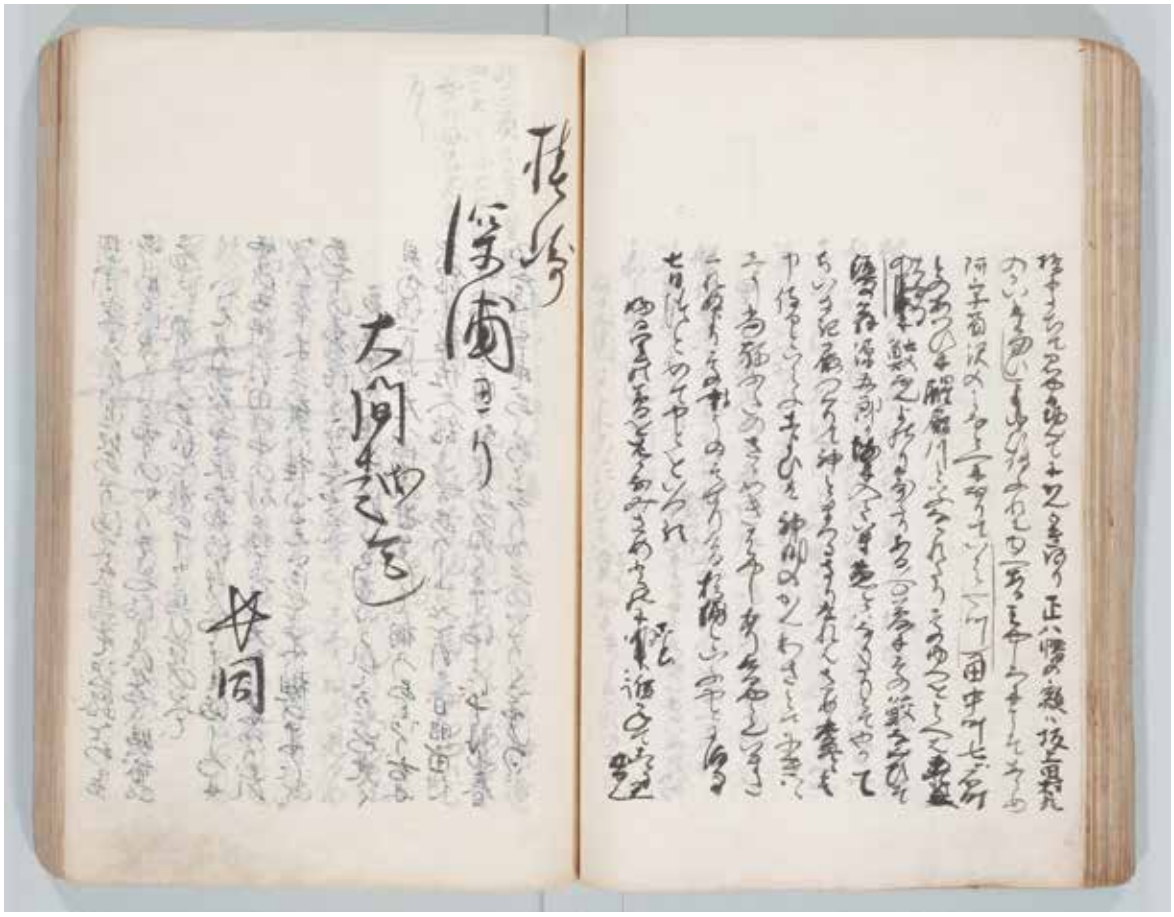
〔参考〕

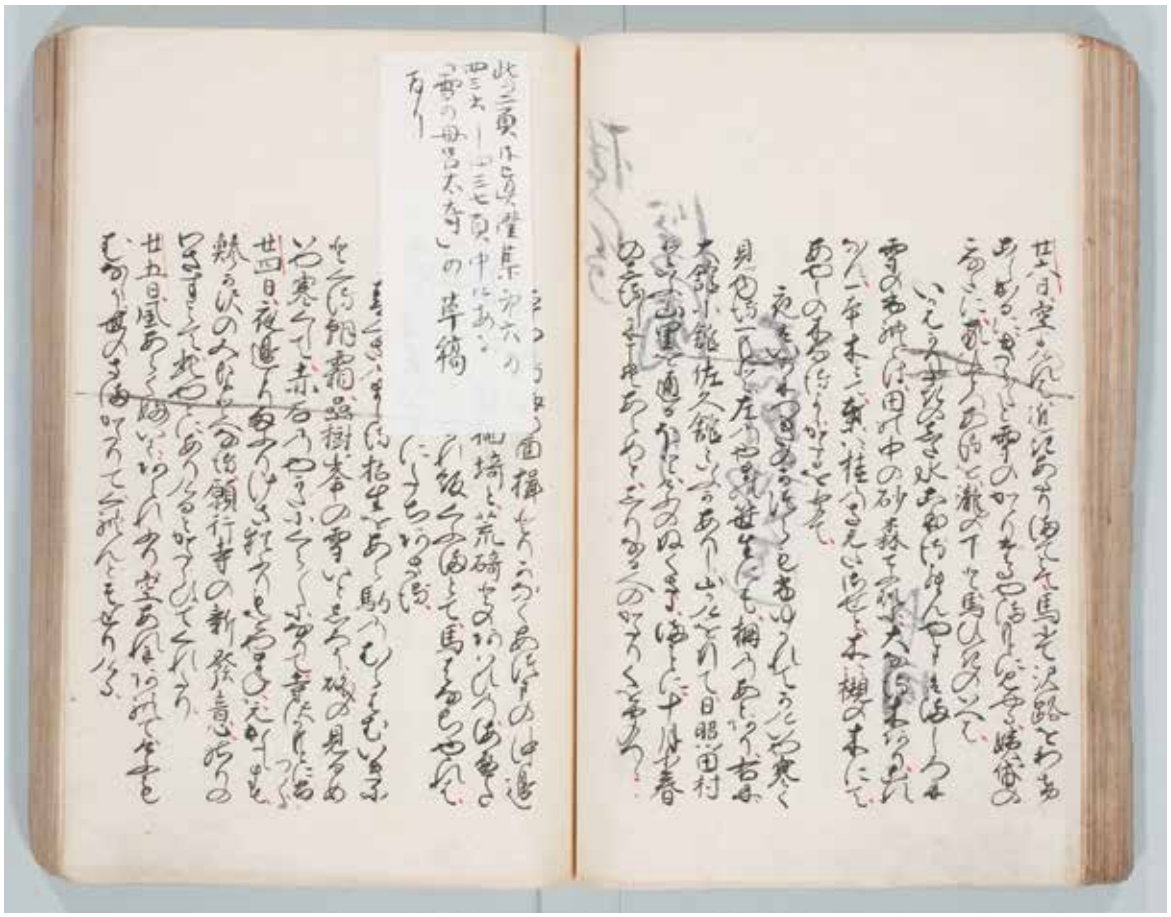
・青森県史編さん民俗部会編集『青森県史　民俗編　資料　津軽』（青森県、二〇一四年）
・内田武志・宮本常一編集『菅江真澄全集』第三巻（未来社、一九七二年）
・内田武志・宮本常一訳『菅江真澄遊覧記』１（平凡社、一九六五年）
・内田武志・宮本常一訳『菅江真澄遊覧記』３（平凡社、一九六七年）

※　本解説は青森県立郷土館元学芸員本田伸が本資料の県指定申請時に作成した資料に負うところが多い。

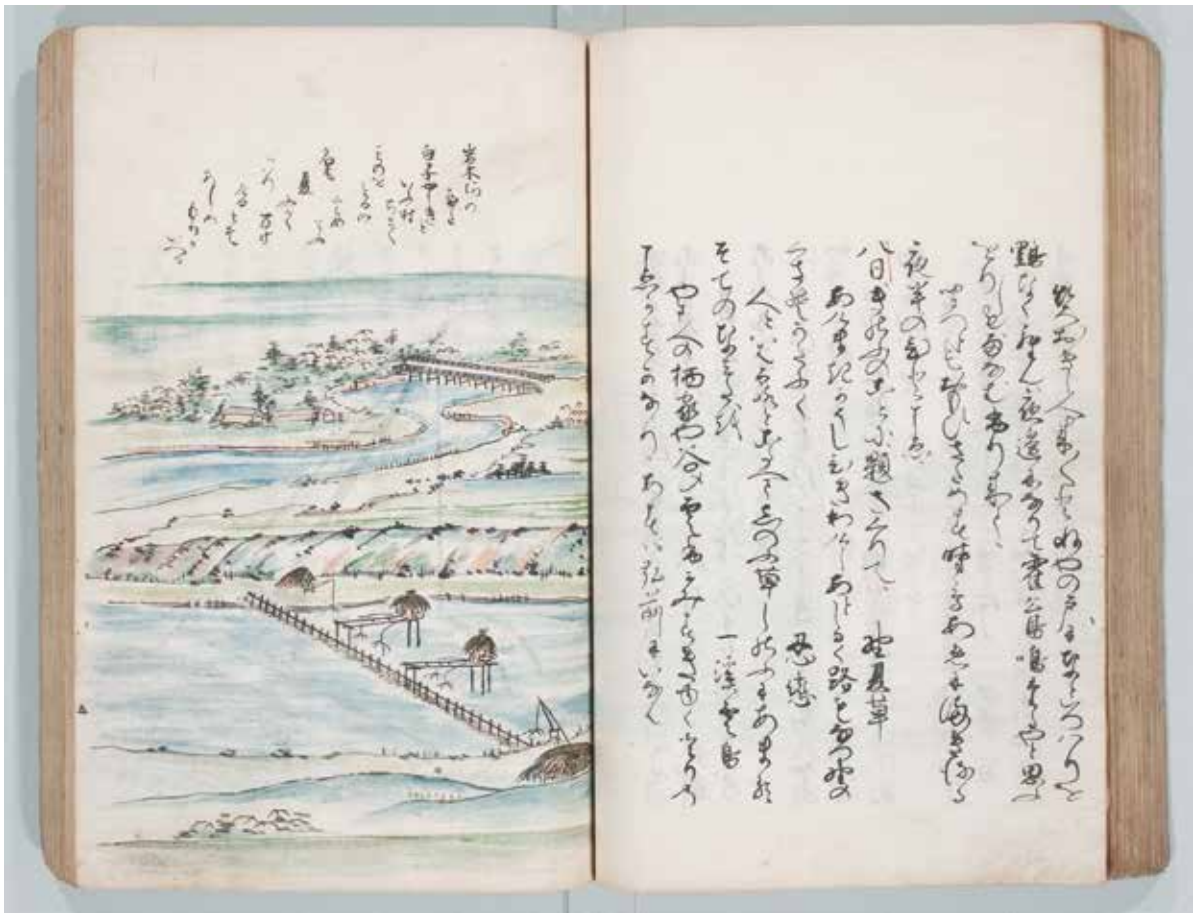
（古川　実）







康永三甲六月
木食萬良九拜



## 【8】暗門山水観

写三冊

青森県立郷土館蔵（一七九一―一～三）

〔書名読み〕あんもんさんすいかん

〔筆編者〕山形岳泉（やまがたがくせん）

〔写刊年次〕明治四十一年（一九〇八）

〔寸法〕縦三〇×横二〇・一糎

〔丁数〕①一九丁、②一八丁、③一八丁　五二図

〔備考〕題簽に「暗門山水観」、その下に各冊「壱」「弐」「参」と墨書されている。各冊の奥付に「明治戊申季秋　山形岳泉」とある。

〔解説〕

山形岳泉（以下、「岳泉」と記す。）は『青森県人名事典』によれば、生年は嘉永五年（一八五二）、没年は大正十二年（一九二三）。名は太郎九郎。山形家は弘前藩の武家であったが、廃藩後は貸金業を営んでいたという。弘前の絵師・国学者として著名であった平尾魯仙（一八〇八～一八八〇、以下「魯仙」と記す。）に岳泉は若くから師事し絵を学んだ。魯仙没後は、師が描いた膨大な作品群を忠実に模写し後世に伝えた。「暗門山水観」も岳泉筆による魯仙の粉本模写である。この画集と魯仙の自筆作品の成立事情については、『青森県立郷土館研究紀要』第三七号に掲載された本田・竹村論考に詳しい。以下、この論考に従って成立事情の概要を述べることとする。

魯仙は文久二年（一八六二）の六月一日から三日までの行程で、弟子たちと連れだって秘境暗門の滝（現西目屋村）を目指した。道中で出会った山の暮らしや自然景観などを帰ってからすぐに絵に描いた。また、旅の内容を文にし「安門瀑布紀行」（以下、「紀行」と記す。紀行翻刻文が前述の論考に掲載されているので参照されたい。）と題して冊子にもした。その後、絵は清書のうえ「安門瀑布図」（三冊　五二図）と題してまとめ「紀行」を添えて一組とし、現在は宮内庁書陵部が所蔵するところとなった。「安門瀑布図」の奥付には「明治九年（一八七六）夏六月改写　六十九翁平尾亮致」とあり、魯仙自筆の作品である。岳泉の「暗門山水観」は奥付に明治四十一年とあり、どの絵をいつごろ模写したのかは不明であるが、「安門瀑布図」の各絵図と「暗門山水観」の絵図は色遣い、書き込みなどに若干の違いがあるものの同じであるという。

絵図は基本的に暗門の滝までの行程順に綴じられている。旅の目的地であった暗門の滝とその周辺の絵図は力強く鋭い筆致で描かれている。宿でくつろいだ様子やその村（西目屋村川原平。現在はダム湖となっている。）の暮らしぶりも「川原岱村古風之図」と記した絵に描いており、この絵から読みとれる江戸時代末の山村習俗は民俗研究のうえで貴重であることは、青森県の民俗学の先導者故森山泰太郎がすでに指摘しているところである。「紀行」には暗門の滝から戻り「川原平村に着いたのは日も暮れた午後六時すぎごろと思われる。夜、宿の主人がイワナ、ヤマメのすし、フキ、筍の漬物などを取り揃え酒宴を催してくれた。皆で酒を酌み交わしほろ酔いで眠った」と記している。

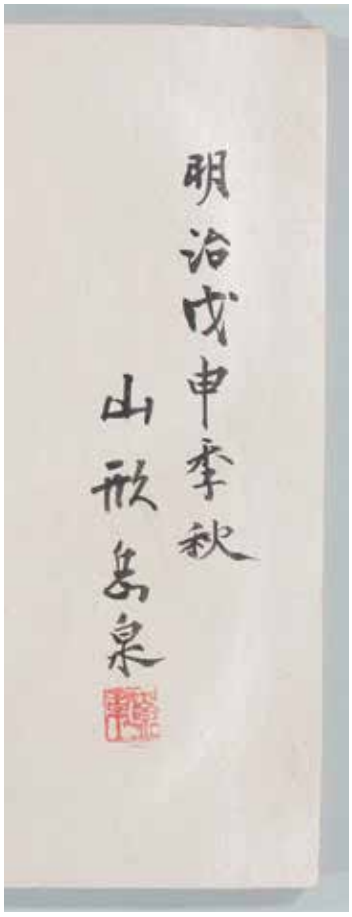
〔参考〕


・青森県立郷土館『平尾魯仙　青森のダ・ヴィンチ』（二〇一三年）
・東奥日報社『青森県人名事典』（二〇〇二年）
・本田伸・竹村俊哉「平尾魯仙が見た暗門の滝―書陵部所蔵「暗門瀑布紀行」の成立事情―」『青森県立郷土館研究紀要』三七（青森県立郷土館、二〇一三年）
・森山泰太郎「第三章（付録）「暗門山水観」」『津軽ダム西目屋地域生

活文化調査報告書』（東北地方整備局津軽ダム工事事務所、二〇〇五年）

・山下祐介編『砂子瀬・川原平を歩いた人びと』（砂川学習館（津軽ダム広報室）、二〇〇七年）

（古川　実）



明治戊申季秋

山形鳥泉

暗門瀑

青森縣中津輕郡西目屋村大字川原平ノ山内ニアリ其形狀自ラ三層ノ階段ヲナシテリ第一層ハ高サ北六丈第二層ハ高サ二十丈第三層ハ高サ十八丈中十丈餘落ツル水ハ懸崖ニ觸レ絶壁ニ激シ餘沫霏散シ空ニ漲リテ下ルコト驟雨ノ如ク裏々百雷ノ聲アリ山谷ニ振動ス其音遙ニ數里ニ渉リ

# 【9】東奥津軽山里海観図

青森県立郷土館蔵（一九二九―一）　写二冊

〔書名読み〕とうおうつがるさんりかいかんず
〔著編者〕清白閑人
〔写刊年次〕元治元年（一八六四）二月
〔寸法〕縦二九・七×横四四・〇糎
〔丁数〕上巻二八丁　下巻三二丁
〔備考〕紙本着色で裏打ち済みで画帳仕立て。本図各頁に様々な大きさのグラビア状の作品が付いていることから、本来は三巻の巻子仕立だった形態を、後世に冊子二冊分に仕立て直したものとみられる。

〔解説〕

「東奥津軽山里海観図」は、旅の絵師で清白閑人という人物が、文久元年（一八六一）秋に、大坂を出て東北地方へ向かい、津軽弘前に三年間居住し、元治元年（一八六四）に描いたものとされ、旧弘前藩領内各地の景勝地や、人々の生活習俗が詳細に描かれている。

清白閑人の実名は不明だが、本資料のなかには、弘前城下の富田に住まいを得ていたことが記されている。また、兼平、高木、佐々木という絵師仲間がおり、津軽各地の景勝地を歩いて描いたとみられる。そのような活動を通じて本資料は「甲子（元治元）年）春二月中」に完成し、高木俊翠に贈られたという。その後、長い年月を経て、平成初期に京都市の古美術商で所蔵されていたが、青森県の歴史・民俗に関わる貴重資料であることが判明したことから、平成十六年に青森県立郷土館が収蔵した。

収められている図は、総計一三二図で、弘前藩領内の霊山岩木山、山里の景勝地である目屋および暗門の滝、城下町弘前と黒石、当時「西浜」と呼ばれて北前船が往来した鰺ヶ沢湊、金井ヶ沢、大戸瀬、深浦、津軽半島北部の竜飛、小泊、十三、三厩、青森近隣の野内、浅虫など、近世から有名だった各地の風景が描かれている。また当時の民衆の暮らしとして、ねぷた、お山参詣、嶽温泉での湯浴み、盆踊り、鰺ヶ沢の綱引き、冬の防寒装束や除雪作業、子供達の遊び、さらには人々が食する魚類等、様々な文物も描いており、現代の状況と比較してその変化を知ることができ、民俗学、自然誌、博物誌資料としても貴重な資料である。

例えば、近世に岩木山中腹にあった真言宗百澤寺の境内を描く一連の図では、明治初期の神仏分離以前の同寺を上空から俯瞰しているが、現在の岩木山神社境内と比較すれば、正面入口の鳥居がなく、参道両脇に「十坊」と呼ばれた各寺庵の建物が並んでいた様子がわかる。

さらに近世の「御山参詣」（お山参詣）の登拝習俗も描かれており、そのなかには今では失われた風景も少なくない。現在の百沢スキー場付近か、登拝道沿いに多くの鳥居が立っており、登拝装束に、脚絆と草鞋がけ、頭には笠をかぶり、片手に小さな白い御幣を立てた参詣者達が、それをくぐるようにして登っていた様子が描かれているが、現在この鳥居群は存在しない。さらに山中の沢道を上り、女人結界を示す「姥石」に到達し、大勢が休息しているが、姥石前の登山道に複数立っている鳥居も失われた風景である。さらにその上方に「大黒石」という二つの大きな石があったようだ。その後は、参詣者が大きな滝を迂回するように急な崖道を登り、坊主ころばし、錫杖清水、風穴、オクラ石、鳥の海、鳥海山、種蒔苗代などの現在も残る山中の名所を経ている。山頂へ到達すれば、「岩木山三所大権現之社巽ニ向」とあり、山頂に何かの像をまつる奥宮と複数の建物、鳥居、石灯籠なども見える。

そして現代と大きく変わっているのが岩木山中にある嶽温泉の図である。二〇世紀以降、観光開発が急速に進んだ嶽温泉であるが、それ以前

の近世の湯治の習俗が映し出されている。「巖城山中嵩温泉湯元之図」では、深山の沢のなかにある嶽温泉に、白い着物を着た人々が浸かっている。また、湯屋の建物内での湯浴みの際の風体まで描かれている後半の資料は類例がない。

また他にも、近代以降、急速に失われ、現在の民俗調査では、ほとんど実体験した世代への聞き取りが困難になった習俗である、河川の渡しの様子が描かれている。例えば目屋の田代之渡では、対岸へ綱を渡して、それを船頭が両手で伝うようにして川舟を渡している図がある。同様の渡しは、十三湖の図でも描かれている。これらは近代に各地で橋が敷設されることによって役割を終え、失われた交通手段である。

弘前城下の町並みも興味深い。「奥州津軽弘前市家屋之図」では、家々の軒下のひさし同士が連なる、いわゆる「コミセ通り」の構造をした町屋が描かれている。現在見られなくなった町の風景として、家々の前を側溝が流れ、その上に橋を渡して玄関へ入っていたこと、家々の屋根が石置き屋根か「土屋根」だったこと、さらにに各家の屋根上にひとつ大きな水甕がのせてあったことである。

「春之賑」の図では、まだ残雪が深い街路を、駄賃付け、蕎麦売、髪結、在之者、家中、イサバ（魚売）、若者（わかいもの）、物貰、芸者など、様々な職層の老若男女が、それぞれの身分を生業に応じた多彩な服装で歩いている。特に防寒のための被り物は、現在では失われた装束も多い。この多彩な和装は、現代、定型化した「和服」のイメージの再検証を迫るものであろう。

さらに「朧雲之図」では、雪の通りを侍や民衆が歩いているが、当時、袴を着け、傘をさした高位の武士らしき人物がソリに乗って、複数の従者が引いている様子もあり、様々な冬の交通手段があったことを示している。

民衆の暮らしとして注目すべき文物は、津軽地方独特の刺し子着であるサシコギンの図、年末の詰めの市で、雪上でムシロ屋根の店とゴザ敷きの商売をしている様子、菅笠に脚絆、ワラ靴に板状の「雪踏」を両足につけて歩く人の姿、カイスキ、スキ、鉄ヘラ、三本グワ、クワ、カギ、マサカリ、ノコギリなどの除雪用具、藁沓、コシキ、かんじき、草履沓、権兵衛、新兵衛靴、箱雪舟などの冬の諸道具類や、雪の坂道で、男児や女児が、舟乗などで遊び、子守娘が小児を箱ソリに乗せて引いている様子、豪雪で一階部分が埋まった家々の屋根上で覆面をして厚着した男が雪下ろしをし、犬が走り回っている風景、屋根から下がる大氷柱（おおしがま）を斧で割っている男、のこぎりで大きな氷雪の塊を切り出している風景などの暮らしの姿があり、これらは昭和初期まで同地方で継承されてきた習俗でもある。

年中行事、祭礼を描いた図も、現代の様子と比較すれば、継承された要素、変化した様子が浮き彫りになってくる。

例えば、春に鰺ヶ沢湊で、大勢の老若男女が集まって騒ぎながら大きな綱引きをしている図は、かつて近隣の深浦湊や、遠い近江大津、越前敦賀など日本海側各地にあった綱引きの習俗の記録である。鰺ヶ沢町では明治期まで、町や村が上（かみ）と下（しも）に分かれて争うようにして綱を引き、勝てば大漁、豊作の幸を獲得できるとされた。画では参加している民衆の服装や表情、しぐさまで詳細に描いており、失われた同習俗の実態を研究するうえで特筆すべき絵画史料である。

また、夏に「痴太鼓」といって、大きな太鼓をひとりでかついで叩く男が描かれているが、当時、弘前城下で禁じられていた行為であるが、現代では、弘前ねぷた祭りの行列でも行われるようになった演奏法である。それを絵画にした資料として稀少である。さらに夏の年中行事「祢布多（ねぷた）」の行列が描かれているが、そこには近代以降のねぷたとは異なる形態の山車群が描かれており、ねぷた祭りの歴史的変化を知るうえで貴重なデータとなる。そして覆面をした人々の盆踊り、弘前八幡宮の

行列、町中を歩く大神楽の行列も、近代以降、失われた行事である。

さらに魚類として、ニシン、ハタハタ、カスペについて動物標本のような細密画が描かれているが、これらは近代以降、現代でも津軽地方の人々が暮らしのなかで食べてきた馴染みのある魚である。他国人であった清白閑人にとっては、当地の生活に密着した特有の魚として眼に映ったのであろうか。

そして津軽各地の名勝地を歩き、その美しい風景を描いているが、現在でも観光地となっている岩木山や山麓部の目屋などの風景については、現代までそれほど大きな変化がなかったことが窺える。しかし、岩木川流域の湿地帯で、近世中後期から新田開発が行われた、現在のつがる市床舞や富萢付近については、近代の圃場整備事業以前の風景が描かれている。当時の旅人が、小丘や沼地のなかを縫うように走る小径を歩いていたことがわかる。

そして西浜と呼ばれた、鰺ヶ沢から深浦にかけての沿岸風景は、現在とは少し異なり、当時は切り立った崖や巨岩が乱立していたことがわかり、近代の国道敷設工事以前の風景を思わせる。さらに日本海交易の拠点だった鰺ヶ沢湊や深浦湊には、複数の北前船の船影が描かれている。それらの船影は近代初頭には失われて、現代人の誰もが実見したことがなく、史料のなかだけで伝えられた失われた日常風景のひとつである。

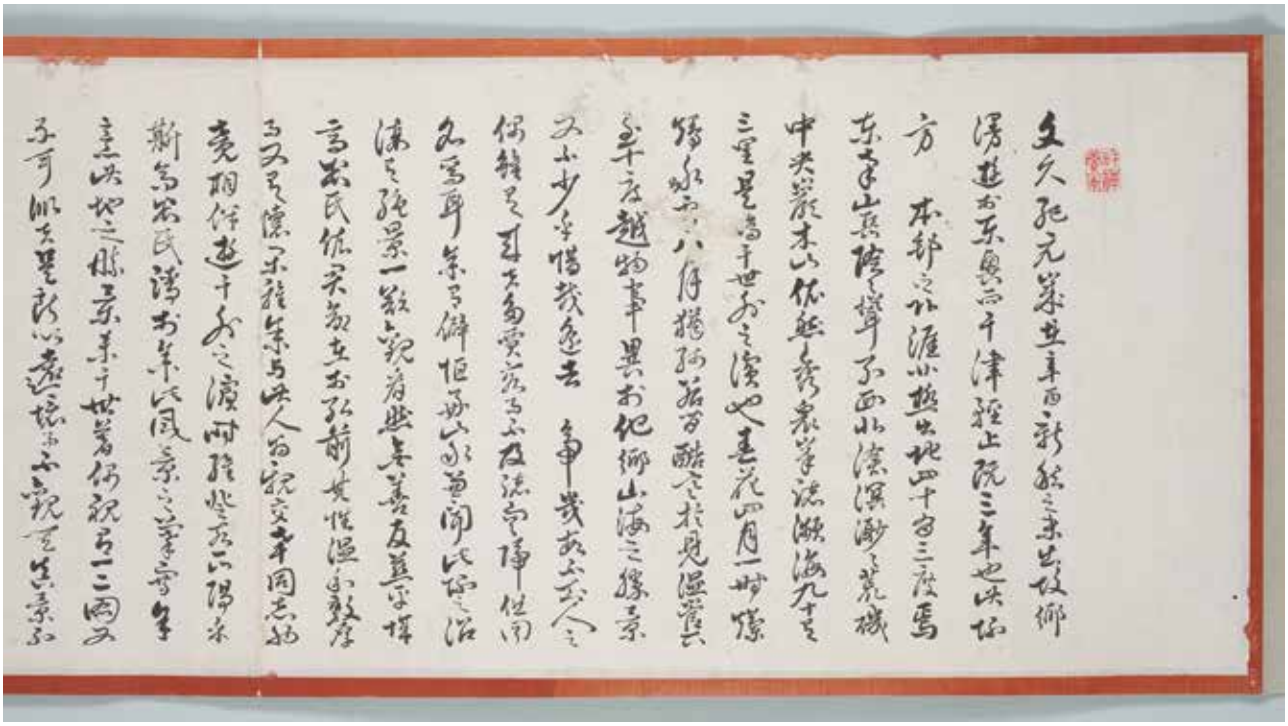
（小山　隆秀）

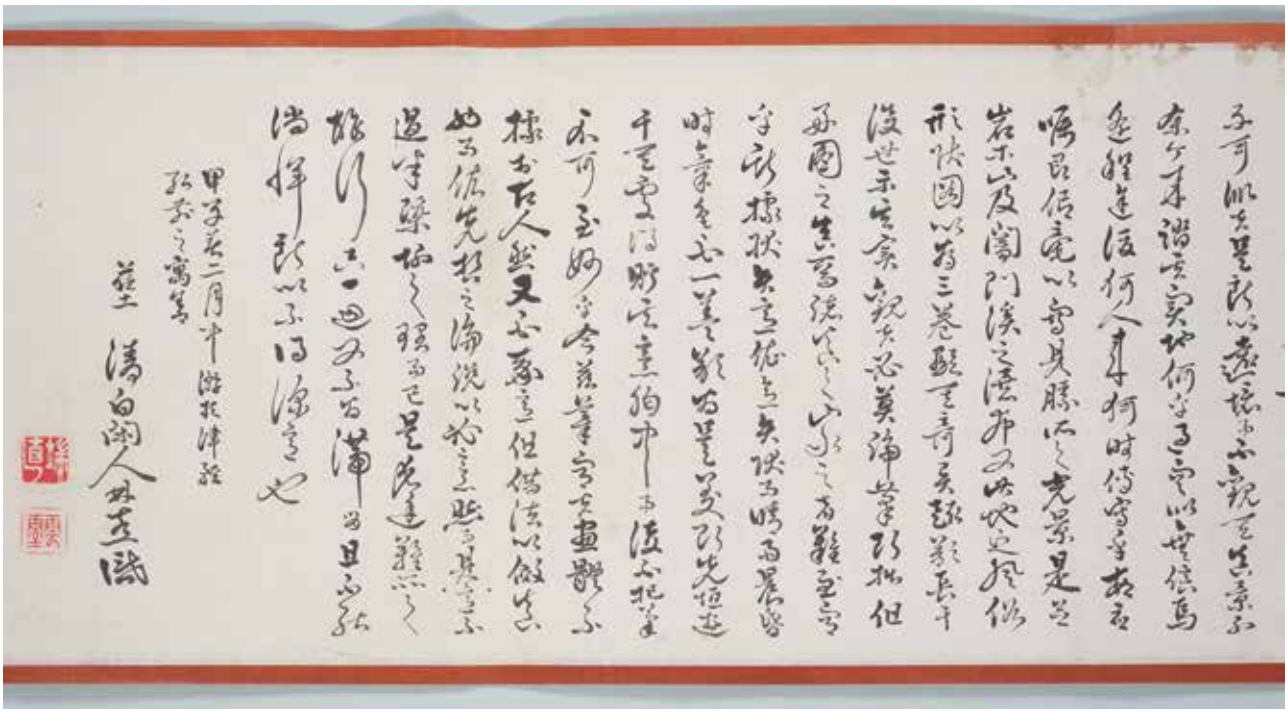
〔参考〕


・北見俊夫「海上交通と文化伝播」（北見俊夫『日本海島文化の研究―民俗風土論的考察―』法政大学出版局、一九八九年）

・小山隆秀「岩木山振興形成における宗教者の役割と習俗の変化」（青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さんグループ編『青森県史研究』八　青森県、一九九三年）

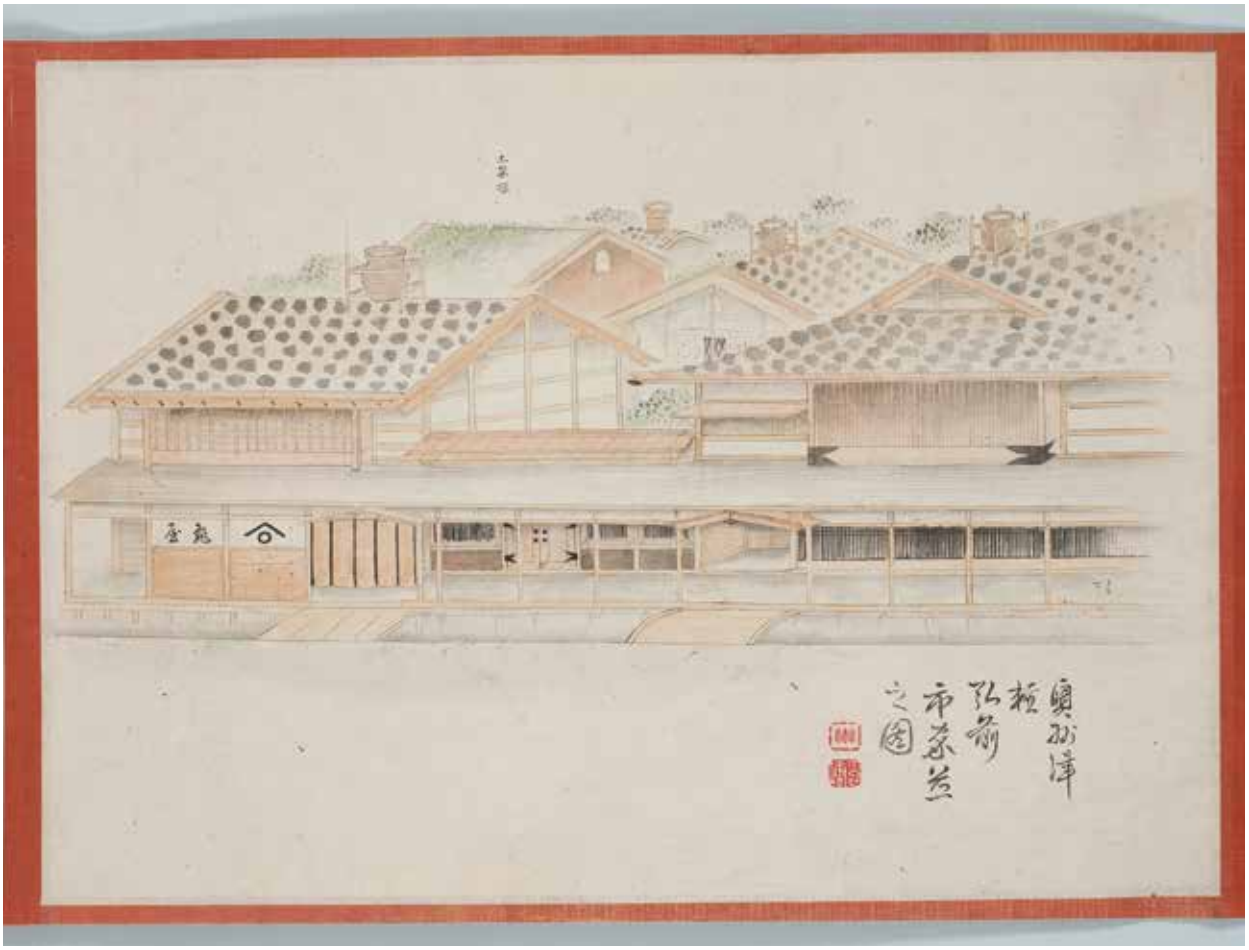
・小山隆秀「「伝統」の希求と創出―青森県津軽地方のねぷた喧嘩習俗を事例として―」（『国立歴史民俗博物館研究報告　第二〇五集［共同研究］民俗儀礼の変容に関する資料論的研究』国立歴史民俗博物館、二〇一七年）





巖木十八景

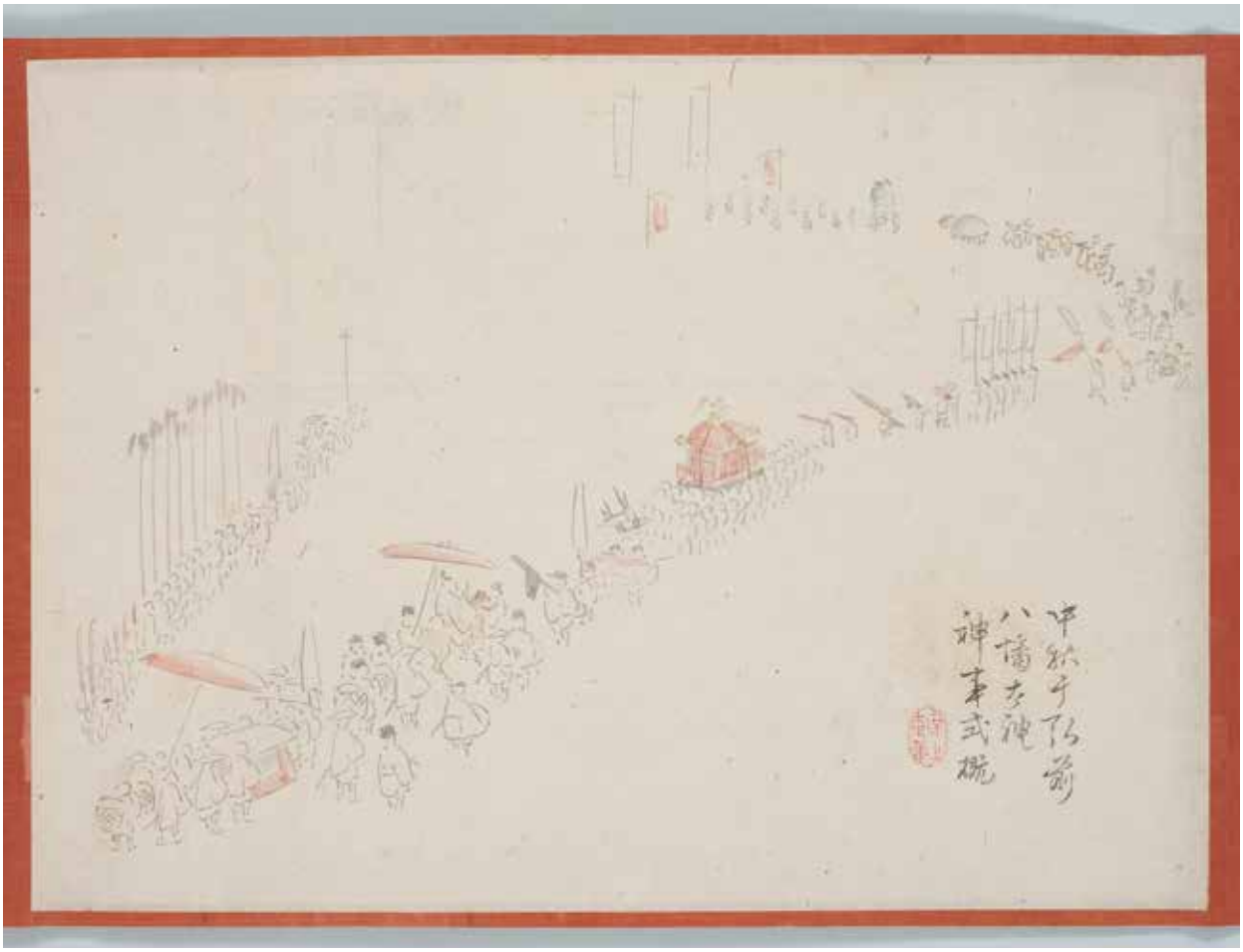
岩木山
經ひ之
圖

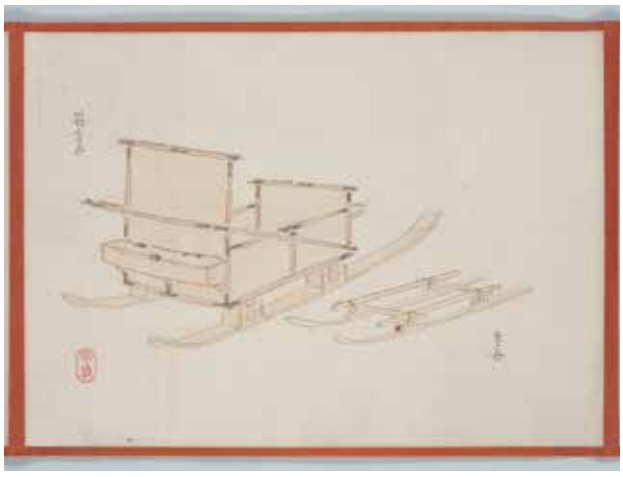

奥州津軽弘前市茶店之図

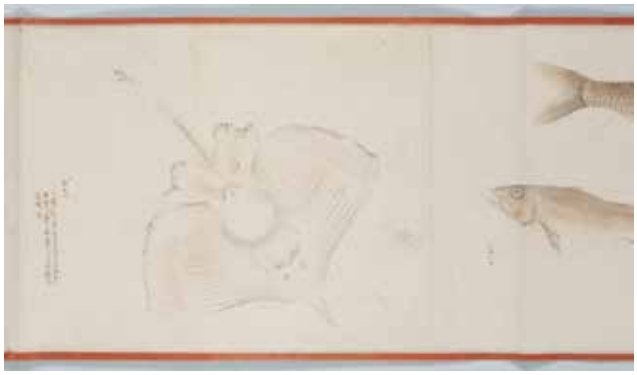
春之賑

王將

王將







# 【10】青森実地明細絵図

刊一枚（複製）

青森県立郷土館蔵（四二〇―一）

〔書名読み〕あおもりじっちめいさいえず

〔著編者〕川瀬善一

〔写刊年次〕明治二十五年（一八九二）五月二十一日

〔寸法〕縦七〇×横九八・五糎（原資料の大きさ）

〔但書〕日本尺度凡六千分之一縮図　本図ニ記載スルモノハ概ネ其ノ位置方向ヲ示スモノニシテ一切隣地境界ヲ訂スコトナシ　編者敬白

〔刊記〕編著人　岐阜県平民　川瀬善一　北海道函館区青柳町五十番地寄留　発行人　東京府平民　神谷久三郎　青森県青森大町百二十九番戸寄留　印刷人　北海道士族　館道策　北海道函館区相生町七十八番地　定価二十五銭大売捌　青森大町　樋口喜輔　同大町　野崎支店　同米町　鎌田書店　同濱町　齋藤直次郎　同安方町　齋藤富次郎　同北海道函館　岡林書林　同　静光堂　同　木村㊀　明治二十五年五月二十日印刷　明治二十五年五月二十一日出版

〔解説〕

この絵図は「実地明細絵図」の名が示すとおり、市街地の実際のありさまを、建築物の外観とともに詳しく描き記した絵地図である。中央の地図と、それを取り囲むように配置された多数の建築物のイラストで構成されている。

中央に置かれた市街地図は、但書にみられるように、おおむねの位置と方向を記した概略図である。方角は北を下に、すなわち青森湾を下方に描いており、海側から町を眺める構図をとっている。地図の下に小さく描かれた「青森港之真景」と題された一コマのイラストも同様に海側から青森の町を描いている。港を玄関口とする臨海都市を描く視点として自然な構図である。地図内の右手には発行の前年（明治二十四年九月）に開通した日本鉄道の青森停車場が記されるとともに、主要駅までの里程表が併載されている。また、下中央には桟橋が描かれ、全国主要港までの里程表と運賃表が併記されている。人と物の交通の便益をはかり産業の振興に役立てたいという編者の意図（後述）をみることができる。

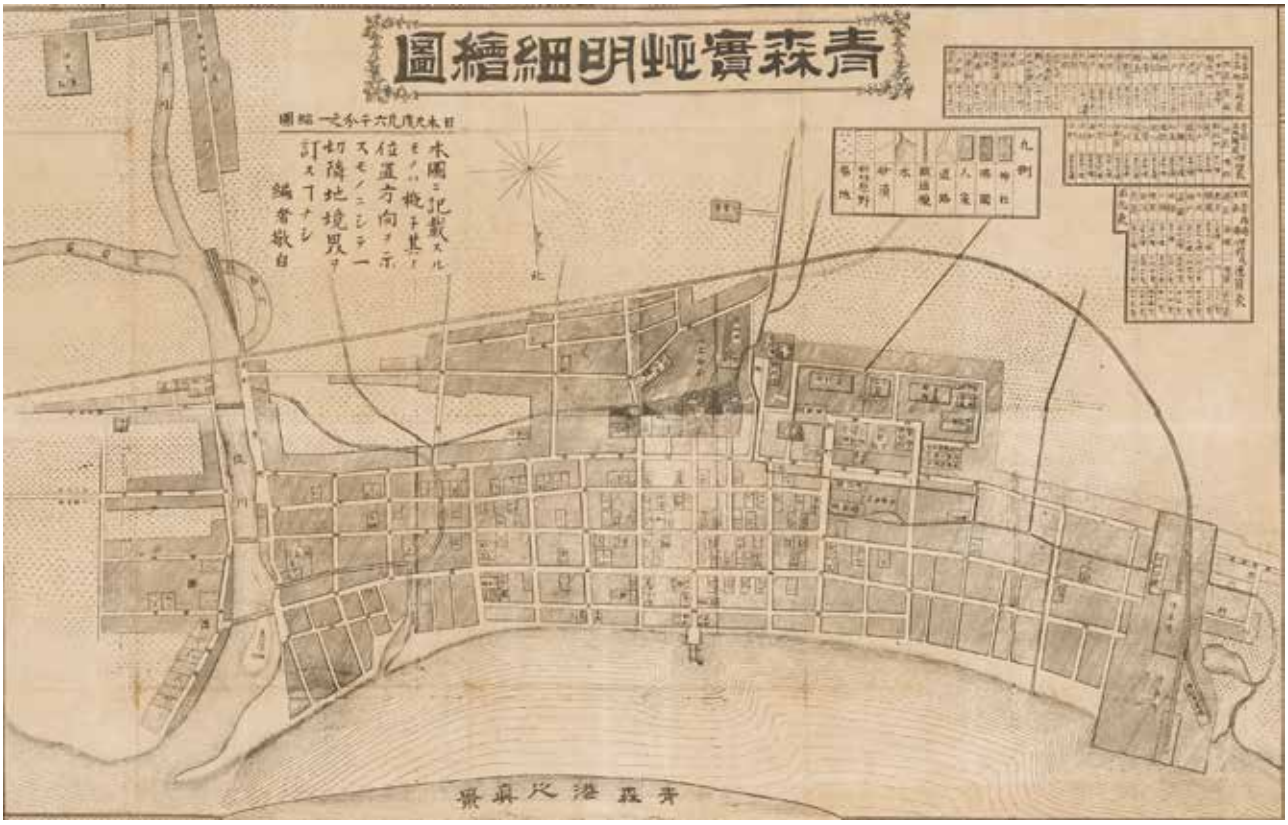
地図を囲むように配置された一二九コマの絵図には、当時の青森町内の建物の外観が簡略化されて描かれている。県庁、町役場、裁判所、学校、停車場などの公共施設が五コマ、製造業、小売業、旅館業などの商工業施設等が一二四コマ描かれている。後者については、業種（取扱商品）、屋号、所在（町名）、経営者名が併記されており、商工業案内としての用途と同時に、商業広告としての役割を兼ねていたものと考えられる。ただし町にあるすべての商業施設が描かれているわけではないことから、その選定の規準に広告料や掲載料の徴収の有無があったのではないかと考えられる。また、掲載面積は一コマ分～三コマ分までの三種類がみられることから、面積に比例した掲載料の徴収があったことが考えられる。ちなみに三コマ分の面積を占めるのは、味噌醤油の醸造と海産物の貿易で名をはせた金与・田中與太郎商店ただ一軒である。

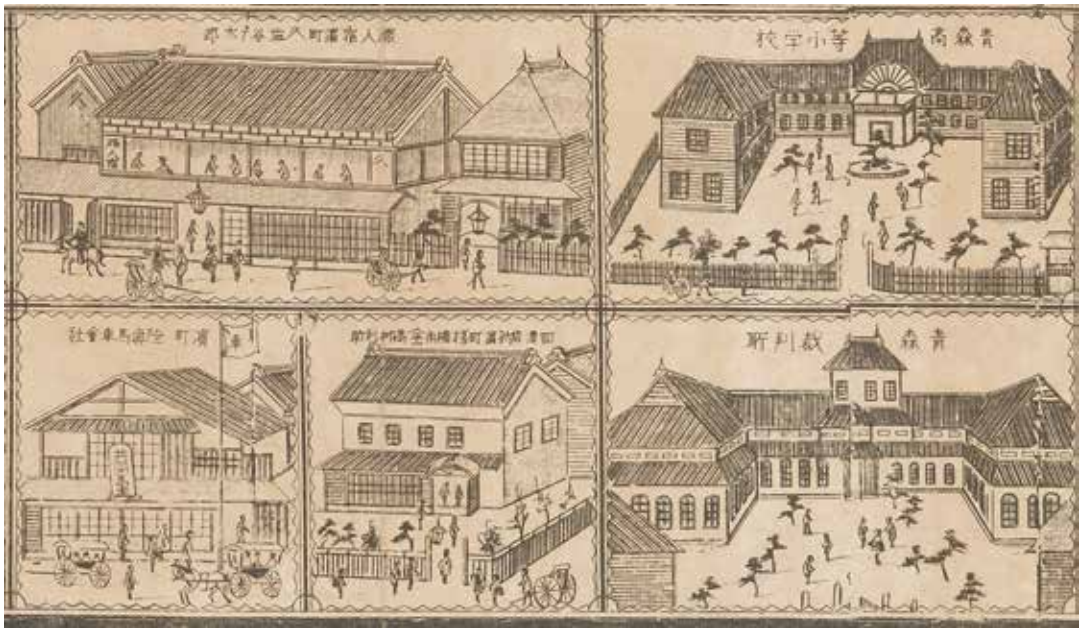
発行者の川瀬善一は岐阜県の出身で、この絵図の出版当時は北海道函館区（現函館市）に住んでいた。本絵図のほか、居留した函館をはじめとする道内各地や、出身地である中京圏の絵図を複数編纂している。実地明細絵図を刊行した目的や動機については記されていないが、この絵図の発行より八年前、明治十七年に同氏が編集した商工案内書の記述が参考になる。「土地ノ位置等ヨリ各商業工職農家ノ町村姓名ヲ以テシ看者ヲシテ営業種類ヲ一覧瞭然タラシム是ニ由テ広ク世上ノ交際ヲ導キ各

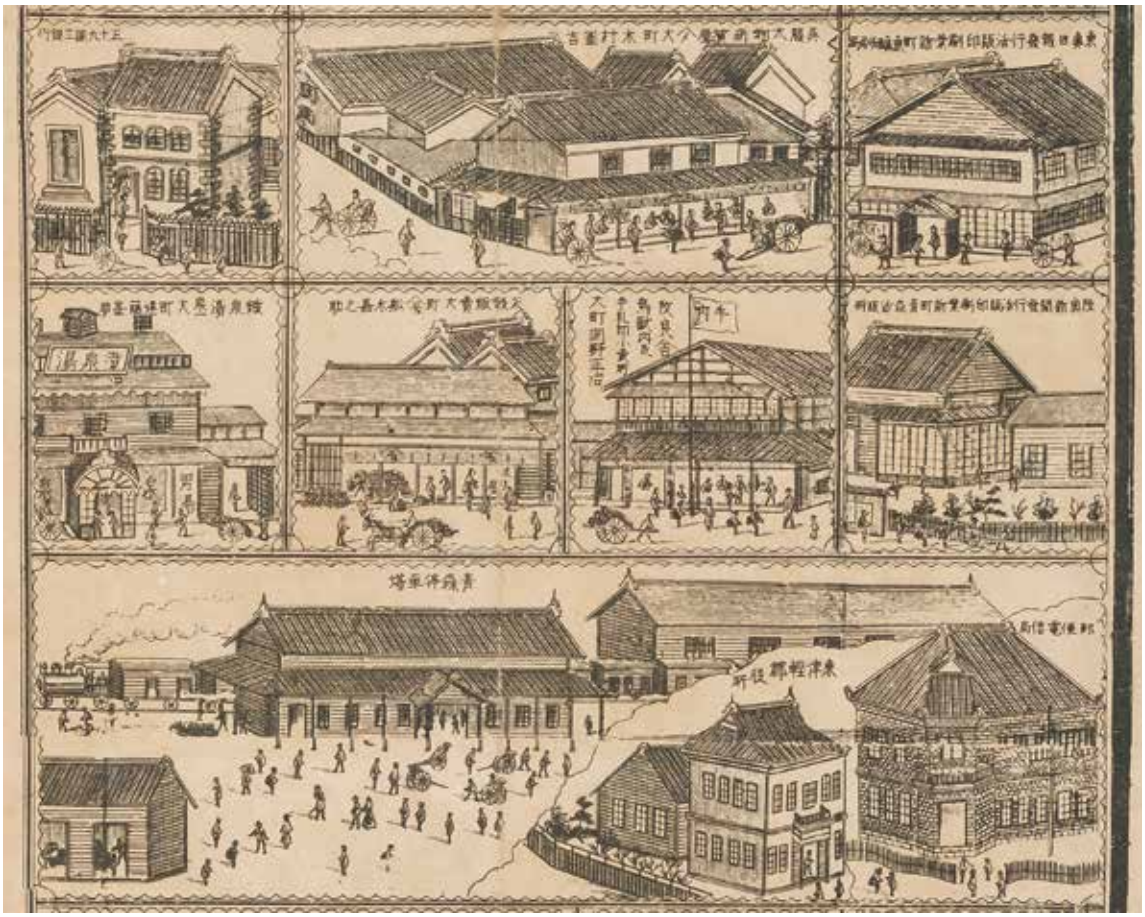
地ノ土産ヲシテ普ク運搬ノ便益ヲ謀リ有ヲ以テ無ヲ補ヒ余ヲ以テ不足ヲ翼ケ彼此交換シ以テ他日諸業ノ面目ヲ一洗シ弥々殖産ノ繁昌ヲ一国社会ヱ伝ヱ（中略）此編ヲ観ル諸彦冀クハ左ノ連名ノ実業家ニ交際シ其物品ノ運転ニ因リ大ニ公私ノ洪益ヲ起シ他日好結果ノ幸福ヲ得ンコトヲ」（川瀬善一編『尾三農商工繁盛記』明治十七年刊）。すなわち、氏の商工案内書の編纂には、業者の名前と所在、業務内容等を紹介することにより、産業の振興に役立てたいという意図があった。絵図の発行にも同様の趣旨があったものと推察される。

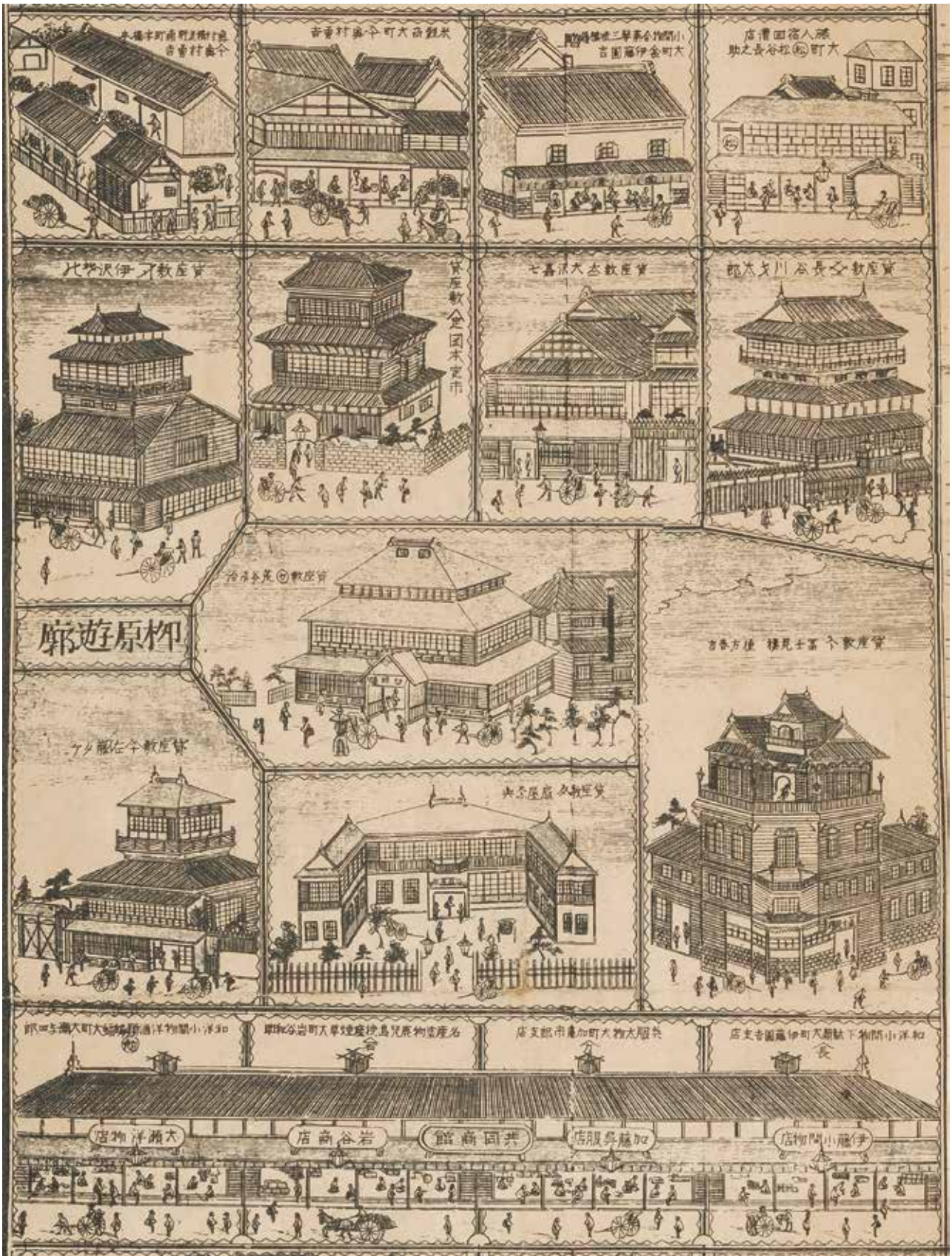
同時期に発行された同意匠の絵図としては、県内ではほかに、「弘前市実地明細絵図」（明治二十六年、神谷久三郎編）、「八戸実地明細絵図」（明治二十七年、浦山十五郎編）が知られている。

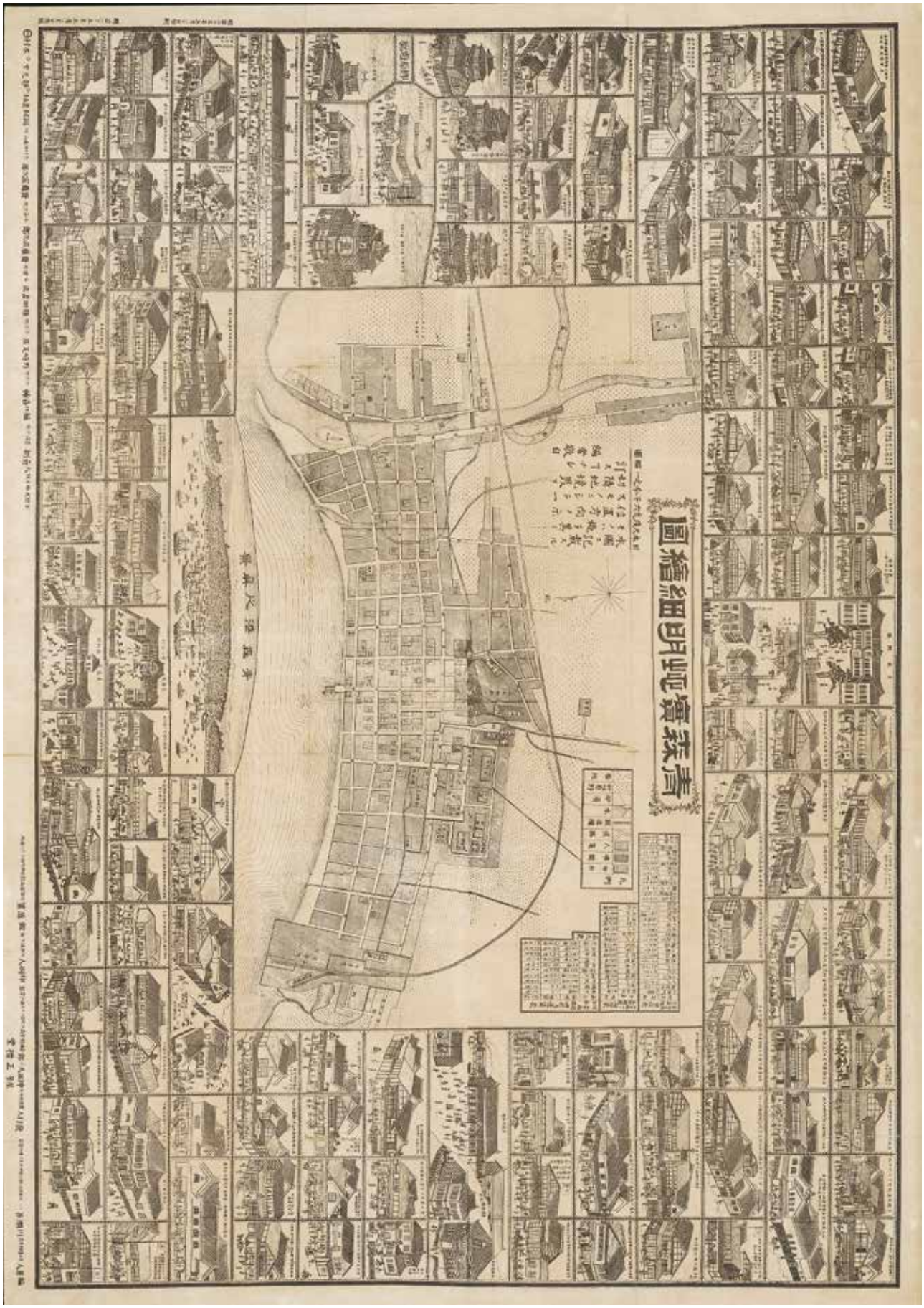
（増田　公寧）




青森尋常小学校
青森裁判所


青森停車場


柳原遊廓
共同商館
岩谷商店
加藤呉服店
伊藤小間物店


青森實地明細繪圖

# 【11】津軽図譜

写二五枚

青森県立郷土館蔵（一六三六―六二）

〔書名読み〕つがるずふ
〔著編者〕百川学庵（文平）
〔写刊年次〕江戸時代（十九世紀前期）
〔寸法〕縦三一・四×横八五・七（最大）糎
〔丁数〕二五枚
〔備考〕絹本着色

〔解説〕

百川学庵（弘前、一七九九～一八四九年）が描いた江戸時代後期の津軽地方の風景・風物画二五枚連作。

学庵は、弘前藩士百川屯助の二子として生まれた。通称文平。父屯助は、江戸で儒学者太田錦城（石川県加賀の人、一七六五～一八二五年）に学び、玉川と号した。弘前藩藩校稽古館の教師に迎えられるが若くして死去し、一家は離散した。幼少の学庵は新寺町（弘前市）の本行寺に預けられたという。

数年後、学庵は江戸に出て、父の師であった錦城のもとで儒学を学んだ。画を好んだ学庵は、やがて江戸画壇の重鎮谷文晁（一七六三～一八四〇年）に出会う。松平定信が編さんした『集古十種』の挿図を担当した文晁らの作画姿勢に大いに刺激を受け、学庵は本格的に画道に目覚めたという。

儒学や詩文にも父親譲りの才能をみせた学庵は、文政四年（一八二一）、弘前藩に召し抱えられたが、弘化三年（一八四六）に藩の意にそぐわなかったということで隠居を命ぜられた。その後、浪岡（現青森市浪岡）で寺子屋を開き、子弟の教育にあたったといわれるが、具体的にどのような活動を行ったのか確認されていない（『浪岡町史』）。

本図譜には、津軽地方の景勝地の他、藩御用船永徳丸（第二図）、ウトウ（第四図）、ホウボウ（第七図）、エイ（第八図）など珍しい鳥魚類も含まれており、博物画的性格も併せ持つ。特に、エイ（第八図）は、背面腹面と並べる構図をとり、実物記録にこだわった姿勢も見てとれる。また、彩色の仕方にも気を配るなど、絵師としての高い技量もよく表れている。各題には、漢文で数行の説明が添えられ、紀行画・博物画として鑑賞することもできるが、実際にどのような目的で描かれたのか制作の意図、成立については不明である。

第四「善知鳥図」に「原掲此図野貞彦之画也、今縮写之」とあることなどから、比良野貞彦（生年不詳～一七九八年、『奥民図彙』画者）の原画の存在が指摘され、「外浜画巻」が有力とされているが、現在見つかっていない。体裁からみて本図譜二五枚は、縦寸法は同寸であるが、横寸法は三〇糎から八五・七糎とばらつきがあり、第二五（図）の左端には、画の区切りを示す墨線も確認できる。そのため、もとは巻子本（画巻）の体裁をとっていた可能性も考えられる。

当館所蔵になる以前は、『外ヶ浜・西浜二十五図』と呼ばれていた（『津軽の絵師』弘前市立博物館）。

青森県立図書館特別資料に、同じ原画を模写したと考えられる『合浦外浜名勝』（小山内釣月写、明治四十三年、一九一〇）がある。

第一　青森海上泛船船中眺望図
第二　永徳丸図
第三　善知鳥祠図
第四　善知鳥図
第五　浅虫村眺望図
第六　烏頭前桟図

第七　保宇婆宇魚図
第八　黄貂魚背図　同前腹面図
第九　平内雷電祠図
第十　滝之澤牧場眺望図
第十一　従宇田村至奥平部村途中図
第十二　鷹野崎図
第十三　三厩戊館眺望図
第十四　従宇鉄村赴龍濱途中図
第十五　龍濱崎眺望図
第十六　従算用師抵片刈石沢図
第十七　七滝図
第十八　緑青巌図
第十九　小泊稲荷山眺望図
第二十　大間崎図
第二十一、二十二　従大間崎赴権現崎途中姥島図
第二十二　権現崎図
第二十三　十三渡口図
第二十四　七里濱晩眺図
第二十五　田浦坂眺望図

〔参考〕

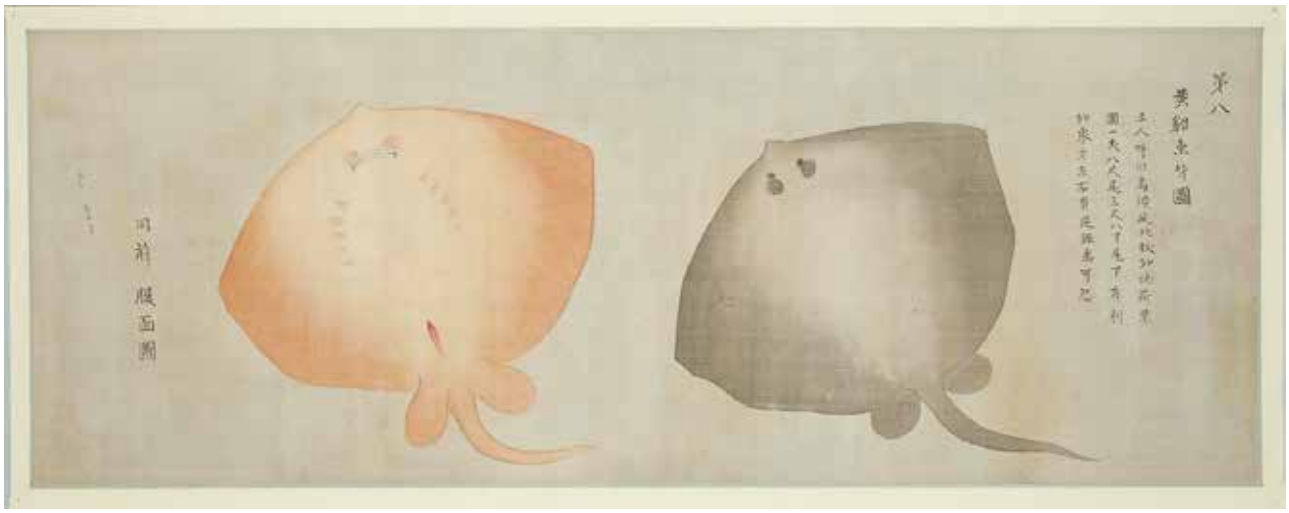

・中畑長四郎『津軽の美術史』（北方新社、一九九一年）
・弘前市立博物館編『津軽の絵師』（弘前市立博物館、一九八二年）
・『青森県人名辞典』（東奥日報社、一九六九年）
・本田伸『シリーズ藩物語　弘前藩』（現代書館、二〇〇八年）
・青森県立郷土館編『描かれた青森』（青森県立郷土館、一九九九年）
・北東北三県共同展実行委員会編『描かれた北東北　北東北三県共同展』（北東北三県共同展実行委員会、二〇〇四年）
・『青森県史　文化財編　美術工芸』（青森県、二〇一〇年）
・『浪岡町史　第三巻』（浪岡町、二〇〇五年）
・本田伸「資料紹介　津軽の絵師・百川学庵に関する新資料―「弘采録」と「百川文平学庵随筆」―」（『青森県立郷土館研究紀要』三八、二〇一四年）


（太田原　慶子）

第五
淺虫村耽望圖

第七

第六


第八
同前 腹面圖

第二十五
田浦拔帆望圖
浦如釣来船
如林人家沿山
而連其灣是
則鎌澤也

## 【12】合浦山水観　西浜　写三冊

青森県立郷土館蔵（一七九一―四～六）

〔書名読み〕がっぽさんすいかん　にしはま

〔著編者〕山形岳泉

〔写刊年次〕不明

〔題名〕合浦山水観　西浜之一・西浜之二・西浜之三

〔寸法〕各冊　縦二六・八×横一九糎

〔丁数〕（西浜之一）一九図　（西浜之二）二三図

（西浜之三）二〇図

〔備考〕紙本着色、和本仕立て。左上に縦二〇・六×横三・四糎の題簽を貼る。三冊ともに蔵書印「武實蔵印」「八木橋文庫」あり。

〔解説〕

江戸末期から明治初期（一九世紀後半）にかけて、弘前で活躍した日本画家平尾魯仙（一八〇八～一八八〇）の原画を弟子の山形岳泉（一八五二～一九二三）が模写し、三冊に編集したものである。

魯仙は、津軽地方の自然景観を多く描き、様々な画譜画冊を残したというが、現在確認できる作品は非常に少ない。魯仙自身が描き、自ら編集したという『合浦山水観』（三冊、安政六年、一八五九年、弘前市立弘前図書館蔵）が残されているが、当館本とは内容が異なる。

「合浦」とは、現在の青森市から東津軽郡一帯を指す古くからの呼称であるが、魯仙は、津軽地方全体ととらえ、東浜、西浜として扱った。従って、『合浦山水観』とは、津軽地方の風景を描いたもの、そして、当館本「西浜」は、西海岸地域（現在の深浦、鯵ヶ沢、小泊周辺）を描いたものである。魯仙自筆の弘前図書館本は、東浜地域を描いたもので、西浜地域を描いたものは現在見つかっていない。

当館本は、岳泉が魯仙の原画を忠実に模写し丹念に彩色したものと考えられ、岳泉の技量の高さを伝えるとともに、魯仙作品の欠失部分を補うものとして、非常に貴重である。成立年代は、同じく師の『暗門山水観』の写しを完成させた明治四十一年（一九〇八）前後と思われる。

岳泉は、弘前藩士山形家に生まれ、名は太郎九郎といった。魯仙につごろ弟子入りしたのかは分からないが、はじめ「泉岳」と号した。魯仙が没した明治十三年（一八八〇）に弟子達が霊前に捧げた「平尾魯仙画像」（個人蔵）の、梅図では岳泉としている。

岳泉は、魯仙の晩年の多くの仕事に関わり、『幽府新論』の付録「異物図会」でも、多くの動植物画の作画を担当している。それらからは、あらゆる事物に対して真摯に向き合い、忠実に描き表現しようとする態度が見て取れる。彼は、独自の作品をほとんど残していない。師の仕事を忠実に模写し、その作品の再現に力を注いだのである。

西浜之一

大森野之図・其二・（フキ図）・権現岩・従オトヒラ眺望鯵ヶ澤・舞戸川より富峯を望む・鯵ヶ澤本町一丁目・鯵ヶ澤白八幡社・鯵ヶ澤弁天崎・金井澤瀧之図・金井澤崎・其二後面・於保舒世・兜岩之図・大戸瀬岩座側面富泊岩側面・従於保舒世趣田野沢道路・其後面之図・田野澤邨之図・田野澤山中飛泉

西浜之二

鳥居崎遠望・鳥居岬之図・其後面之図・釜屋森地蔵岩・追良瀬穴洞崎・追良瀬川・廣戸邨道路滴水甚清シ・吾妻濱之図・坂中ヨリ下町ヲ臨ム図・深浦港之図・浄泉寺背後ヨリ眺望・其二・戎岩之図・戎岩洛中之奇岩・其二・比良嶋一望・吾妻濱ニ錦石ヲ拾ハシ図・無為館ヨリ眺望之図・無為館之二・崩濱之図・常燈之図・寺後面白磐之図

西浜之三
名不知観音堂背後之坂也・其二・横磯邨・舳作沢辺間寺嶋崎・同椿崎・沢辺邨・岩崎邨・其二・森山邑・洞窟カンカ穴・同洞穴之内・弁天崎・森山濱・其二　一ツ石之図・鸚鵡石・日暮之一山悉白壁ナリ・十二池・十二池の内四の池の水面に枯木生る図・須郷崎・牛石

〔参考〕

・中畑長四郎『津軽の美術史』（北方新社、一九九一年）
・弘前市立博物館編『津軽の絵師』（弘前市立博物館、一九八二年）
・青森県立郷土館編『描かれた青森』（青森県立郷土館、一九九九年）
・北東北三県共同展実行委員会編『描かれた北東北　北東北三県共同展』（北東北三県共同展実行委員会、二〇〇四年）
・『青森県史　文化財編　美術工芸』（青森県、二〇一〇年）
・『合浦山水観』（弘前市立弘前図書館、一九八七年）
・深浦町総務課・深浦町歴史民俗資料館編『二人の絵師が描いた深浦之景』（深浦町・深浦町教育委員会、一九八六年）
・青森県立郷土館編『平尾魯仙』（青森県立郷土館、二〇一三年）


（太田原　慶子）

堂个澤貝沢両邨ノ中ニ
傾城岱ト号フアリ其処ニ
図ノ如ク葉ノ茎付ノ表面
ニ小葉二枚對生ス実ニ
希世ノ物ト云ヘシ俗説ア
レモ畧ス

蜂ケ澤
白八幡社

於保錦也

鳥居岬之景

追哀瀬川

深浦港之圖

帝燈之圖

十二沈

十二沈の内四の沈の
水面に枯木まで

須郷崎

牛石